ピアノ部会 **太 田　恵 美 子** 〒182-0033 調布市富士見町 3-3-34 Tel/Fax(042)482-4818	声楽部会 **笠　原　　た　か** 〒524-0012 守山市播磨田町 1456-1 Tel (077)514-0005/Fax (077)514-0036
理事　弦楽部会 **北　川　　靖　子** 〒165-0027 中野区野方4-38-8 Tel/Fax(03)3385-3284	理事　財務局長/機関誌出版部長 作曲部会 **橘　川　　琢** 〒108-0073 港区三田 4-11-14-103 Phone(090)2312-5620
理事　ピアノ部会 **栗 栖　麻 衣 子** 〒366-0051 深谷市上柴町東2-1-7　武田様方 Tel /Fax(048)572-0125	ピアノ部会 **小　崎　幸　子** 〒207-0014 東大和市南街1-33-9 Tel /Fax(042) 564-3673
理事　Website編集長　作曲部会 **小　西　　徹　郎** 〒365-0057 鴻巣市幸町３－５ Phone (090)9977-9771	ピアノ部会　ザラフィアンツ・ミューズ会 **斎　藤　寿 美 代** 〒183-0052 府中市新町 2-68-20 Tel(042)366-6452　Fax (042)-366-0545
声楽部会 **佐　藤　　光　政** 〒143-0023 大田区山王 2-1-8-822 Tel/Fax(03)3776-6566	邦楽部会 **佐　薙　　の り　子** 〒064-0804 札幌市中央区南四条西13丁目1-32 Tel/Fax(011) 561-5735
声楽部会 **芝　田　　貞　子** 〒162-0052 新宿区戸山 1-18-6 Tel/Fax(03) 3209-9666	声楽部会 **嶋 田　　美 佐 子** 〒277-0863 柏市豊四季 643-25 Tel (04)7175-4731 /Fax(04) 7175-4755
賛助会員　作曲・ピアノ **島　筒　　英　夫** 〒184-0013 小金井市前原町 3-10-5 Tel (042)381-0932	理事　事務局長　オーディオ **高　島　　和　義** 〒344-0023 春日部市大枝 360-1-427 Tel/Fax(048)734-1829

理事　機関誌副編集長　作曲部会　邦楽部会
高　橋　　通
〒357-0041　飯能市美杉台5-11-25
Tel/Fax (042)971-0503

理事　出版局長　楽譜出版部長　作曲部会
高　橋　雅　光
〒351-0111和光市下新倉5-14-10クリオ西高島平壱番館305　Tel/Fax (048)465-8229

邦楽部会　生田流箏曲
高　橋　澄　子
〒357-0041　飯能市美杉台5-11-25
Tel/Fax (042)971-0503

副理事長　ピアノ部会
戸 引　小 夜 子
〒164-0013 中野区弥生町 5-9-2
Tel/Fax(03)338l-6691

理事　相談役　機関誌編集長　作曲
中　島　洋　一
〒190-0031 立川市砂川町 5-36-3
Tel/Fax(042)535-3294

声楽部会
中　村　貴　代
〒171-0014 豊島区池袋２丁目２６－６
Tel/Fax (03)5951-6034

ピアノ部会
並　木　桂　子
〒176-0023 練馬区中村北2-2-13-301
Phone(080)3003-2102　Fax(03)5241-8847

ピアノ部会
原　口　摩　純
〒225-0002 横浜市青葉区美しが丘 2-31-20 城様方
Tel (045) 902-4959

理事　ピアノ部会　八王子音楽院
広 瀬　美 紀 子
〒192-0046　八王子市明神町 2-23-10
Tel/Fax(042)656-2395

ピアノ部会
古　川　五　巳(泉)
〒251-0038　藤沢市鵠沼松が岡2-14-4
Tel(0466)25-9449　Fax(0466)23-3692

理事　公演局長　作曲部会
北　條　直　彦
〒157-0066世田谷区成城3-5-6
Tel/Fax(03)3417-1947

ピアノ部会　ＮＰＯ法人「少年ケニヤの友」理事
「多摩アフリカセンター」代表
八　木　宏　子
〒206-0021　多摩市連光寺１-34-3
Tel(042)374-3245　Fax(042)-374-3038

ピアノ部会
山　下　早　苗
〒104-0051 中央区佃2-1-1-1306
Tel / Fax (03)5547-3130

研究・評論　機関誌副編集長
湯　浅　玲　子
〒166-0004 杉並区阿佐谷南1-39-12
Tel/Fax(03)3315-0632
http://www.reikoyuasa.com

声楽部会
吉　仲　京　子
〒113-0032 文京区弥生1-2-9
Tel /Fax(03) 3813-1471

グラビア　EL オーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べ 第1部

2014 年 11 月 21 日（金）ヤマハエレクトーンシティ渋谷

ハイドンピアノ協奏曲 ピアノ：寒河江真弓
エレクトーン：西山淑子　千葉祐佳

司会役の佐藤光政氏

モーツァルト コンサート・アリア
Sop.：笠原たか／P.：広瀬美紀子 他

グリーグ：ピアノ協奏曲　ピアノ：戸引小夜子
エレクトーン：西山淑子　鈴木栄奈

バーバー：ヴァイオリン協奏曲　ヴァイオリン：木下 晶人／指揮:寺島康朗
エレクトーン：千葉 祐佳　鈴木栄奈　佐々木 彩香

EL オーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べ　第2部

髙橋通：コンチェルティーノ　箏　高橋澄子
Elec.：鈴木栄奈　佐々木彩香

モーツァルト『魔笛』より　夜の女王のアリア
Sop.村上貴子／Elec. 西山淑子　佐々木彩香

ブラームス: ピアノ協奏曲　第２番 ピアノ：浅井 隆宏 指揮：寺島 康朗
エレクトーン：千葉 祐佳　鈴木栄奈　佐々木 彩香

開演前に撮影した　出演者＆司会者の記念写真

第 565 号

音楽の世界

目　次

ｸﾞﾗﾋﾞｱ　EL オーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べ

論壇　新しい年を迎えて　深沢 亮子　6

特集　2015 年新春座談会

音楽と会の未来を語り合う

北川暁子・浦　富美・湯川亜也子・栗栖麻衣子・広瀬美紀子
橘川　琢・小西徹郎・中島洋一　8

リレー連載　**未来の音楽人へ(19)**　八木 宏子　22

連載

電子楽器レポート・連載－21 ハイブリッドオーケストラによるオペラ
～熊本オペラ芸術協会と韓国室内オペラ団の事例を通して～　阿方 俊　26

歌の道・我が音楽人生（11）　久住 祐実男　29

音・雑記ーひなの里通信ー（74）・・・・・・・・・・　狭間 壮　30

名曲喫茶の片隅から（55）・・・・・・・・・・・・・・・・・・　宮本 英世　32

音 盤 奇 譚（60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　板倉 重雄　34

人･アート･思考塾(9)　小西 徹郎　36

明日の歌を～楽友邂逅点（第 11 回）-2　橘川 琢　38

コンサート・レポート

室内楽の夕べ　～深沢亮子と室内楽の仲間達～　北條 直彦　40

EL オーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べ　小西 徹郎　42

第20回”詩と音楽を歌い、奏でる”トロッタの会　小西 徹郎　45

現代作曲家グループ「蒼」**《金管五重奏による5つの視点》**　小西 徹郎　47

音楽時評　ショパンの心臓　時評　政治家の勇気　フクロウ　49

追悼文　村方千之さん/丸山亜季さん　助川敏弥/高橋雅光　50

追悼文　遠山一行さん　編集部　51

皆様へ　『音楽の世界』刊行体制変更のお知らせ　本誌編集長　52

新年会の案内　53

CMDJ 会と会員の情報　54

論壇　新しい年を迎えて

ピアノ：深沢 亮子

新年おめでとうございます。本年も何卒よろしくお願い申し上げますと共に、皆様のご健康ご多幸、そしてそれぞれのお仕事の益々のご活躍をお祈り致します。

さて、今年は日本音楽舞踊会議創立 50 周年（実際は 53 年になりますが）にあたり、6 月 14 日（日）の午後、上野の東京文化会館の小ホールに於いて記念コンサートが行われます。この音楽団体は現在、作曲、ピアノ、声楽、弦、評論、舞踊、そして新しく邦楽の部が加わり 7 つの部門となりました。音楽関係者のみで運営されておりますが、こうした団体は世界中どこを探しましても他に類がないと思われます。（ヨーロッパ等、個人主義の強い国で育った人々の集団では、このような会は余りうまく総まらないのかもしれません）

私は 30 歳の頃から作曲家、助川敏弥さんより作品の初演をお頼まれし、今日に至っておりますが、30 代の後半、それがご縁で音楽舞踊会議の会員に入れて頂きました。そして今も尚、会との関わりは私の音楽活動の一つの重要な部分を占めております。

この会が最初に産声を上げたのは 1962 年。当初は音楽舞踊文化会議と呼ばれており、6 月 27 日に創立総会が開催され、7 月 18 日に第 1 回常任運営委員会が開かれ、事務局長に、宗像和氏、常任運営委員に芥川也寸志、清瀬保二、北川剛、志鳥栄八郎の諸氏他、13 名の著名な方々のお名前が創刊号に載っております。そこには更に詳しい会の主旨が 7 項目に亘って書かれており、始めてこのような会を創られた方々の熱意がこちらにも伝わって参ります。

昨年 10 月 26 日の臨時総会の折、助川敏弥代表理事のご挨拶の中で、60 年安保終結のあと、評論家の小宮多美江さんが「音楽の世界」社を創立されたことを伺いました。そして数年後に助川さんと小宮さんとが協議され、この雑誌を本会の機関誌とする旨を合意したというお話でした。その後助川敏弥さんは機関誌局長となられ、献身的な働きをされましたが、時代の変化と共に会員の数も減り、雑誌も以前程には売れなくなり、他のスタッフの方々と大分ご苦労をされたようでした。（その頃は幾つかの音楽雑誌や一般の商業誌もいつの間にか消えてゆくものもありました。）

一時は「音楽の世界」廃止論も出ましたが、私達の多くはそれを望まず、縮小という形で、助川敏弥さんの後任、当時の編集長、野口剛夫氏が他の印刷会社を探し経費を半分位に抑える努力をして下さったのでした。雑誌のサイズは、それ以前のものより半分の大きさになりましたが。それでも何かと赤字は増え、数年前から私の親戚で、山梨県北杜市にて障碍をもった方々のための施設を運営しております武田和久、七七子夫妻が、会の協力者として多大の寄付をしてくれております。又、私も会のために少しでもお役に立つことが出来たらと考え、30 年前から始めた 12 月のコンサートも、音舞会スタッフや共演者、また多くの方々のお力添えを得て続けております。このコンサートは勿論自身の勉強にもなり、楽しみでもありますので、これからも元気なうちは出来るだけ継続させたい、と考えております。

「音楽の世界」は諸事情により、今年 4 月から季刊誌として出版されることになりました。雑誌のサイズも元の大きさに戻し、内容も充実させて、と編集長の中島洋一さんを始め、編集部の方々は張り切っておられ、私も読者の方が少しずつでも増えるようにと願っております。

かつてこの会を創り、又雑誌の編纂にあたられた大先輩の方々の理想や熱意を思い返す時、このような方達がいらしたからこそ今の「日本音楽舞踊会議」があり、それに私達も携わることの出来る幸せを感じます。どちらの会も、時代とともにさまざまな変遷や問題が起きるのでしょうし、今後、私達の会もそのようなことがあった場合は、お互い知恵を出し合い、前進しながら、多くの音楽を愛する方々と共に歩んで参りたい、と考えております。

6 月 14 日の 50 周年記念コンサートは、各部門の方達や若い会員諸氏も出演され、きっと明るい未来を感じさせる楽しい演奏会になることと存じます。ぜひたくさんの関心ある方々に聴いていただきたく、関係者一同、皆様のご来場を心よりお待ち申し上げております。

（ふかさわ・りょうこ　　本会代表理事）

2015 年新春座談会
「音楽と会の未来を語り合う」

出席者
北川　暁子：ピアノ部会員　本会理事長
浦　　富美：声楽部会員　　湯川亜也子：声楽　青年部会員
栗栖麻衣子：ピアノ部会員　　広瀬美紀子：ピアノ部会員
小西　徹郎：作曲部会員　　橘川　琢　：作曲部会員　本誌副編集長
中島　洋一（司会）：作曲部会員　本誌編集長

新しい年に向けて

中島：あけましておめでとうございます。まず、それぞれの方々に新年度の抱負を語っていただきます。
栗栖：家事、農作業をしながら音楽を続ける晴耕雨読の生活（笑い）を理想としていますが、奮起してソロのリサイタルもやりたいと思っています。
中島：次は、一番お若い、湯川亜也子さん。
湯川：これまで同様、専門のフランス歌曲の分野を深めながら、オペラなど他の分野にも挑戦し、活動の幅を広げて行きたいと思っています。
中島：次は橘川さん。
橘川：今年は前半だけで新しい曲を６曲、７曲ほど発表する機会を頂くことができました。活動範囲で言えば、それらの機会は今までの場所と新しい場所が混ざっているので、新年度は今までやったことを固めることと、今の位置から移動して新しい場所で表現を拡張、拡大することにも挑戦してみたいと思います。
小西：私は非常にシンプルなんですけと、仕事の単価を上げる。仕事の頻度を上げる。そして発信力を高める。それが目標です。
広瀬：えーと、この十数年間、同じ路線の上を歩いているので、それを一歩でも前進させたいと思います。同じ路線とは何かというと、音楽に素直になれる自分でいたいということです。ところが年と共に色んな雑用が増え、それを引き受けてままならなくなって来ることがあるので、もう一度原点返って、自分が本来求めたかったものを一歩ずつでも進めて行きたいと思っています。
浦：私も重なるようなことなのですけど、3.11 以来いつ何が起こるか判らないので、一日一日大切に過ごして行かなければならないとすごく思うんですね。私は地域密着型のコンサートが多いのですが、それでも、お仕事を頂いていますが、会の事務

局の仕事やその他、諸々のことがものすごく忙しくなり、そういうものに押しつぶされないようにしながら、足下を固めて、少しでも心に響く歌が歌いたいなと思っています。

中島：では北川理事長。（笑い）

北川：じつは宣伝してもいないし、私自身忘れちゃっていて、チラシには何もって書いてないで、プログラにだけ書いてあるんですけど、私は昨年がデビューしてから丁度５０年に当たるんです。大学１年の時から始めているからそんな年月になるんですけど、代表理事の深沢先生などは別として、その頃からずっと続けている人は、いまは殆どいないんですよ。私は意識しないで普通に弾いていますけど、元気でいて、さらに弾き続けたいなと願っています。年にあわせてさらに向上して行ければいいんですけど、いつ骨になるか判らないし、（笑い）そこまで高望みはできませんね。それから、最近は、ベートーヴェンとかショパンとか特定の作曲家に特化したプログラムを持つコンサートが多いのですが、今年はオールラウンドのコンサートを開きたいです。

音楽現代

2015 年 1 月号　定価 1000 円＋税

♪特集 ＝世界のオーケストラ～その現状と未来
♪特別企画＝2015 年年上半期に来日する外国人
アーティストたち（一覧表付き）
♪カラー口絵
・ニッセイオペラ「アイナダマール」
・静岡国際オペラコンクール
・藤原歌劇団「ラ・ボエーム」
・関西二期会「ドン・カルロ」
・テイツィアーナ・ドゥカーティ＆山口研生
♪インタビュー
上岡敏之、ドミトリー・フェイギン
菅原 淳、荒井英治、鴫原奈美
岩川亮子、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMY ビル 3F
芸術現代社　TEL3861－2159

中島：私は免除でいいですね。（笑い）ダメですか。まず、今年は『音楽の世界』の発行形態が月刊から季刊に変わるので、余裕が出来た分、対人関係を広げて、色んな人と接触するようにしたいと思います。それから、８年前に音大を定年退職する時、自分の先生や教員仲間を前にして、まだやり残したことが多くて、それを全部やり遂げるにはあと 200 年くらい必要だろうなどと語ったのですが、あと 200 年生きるのは難しそうなので、どこまでやれるか判りませんが、自分がやり残したことを、マイペースでいいから少しずつ成し遂げて行きたいと思っています。

自分が一番大切に思っていること

中島：では、なかなか言いにくいことかと思いますが、自分が一番大切に思っているものについて、今度は熟年の方から語っていただきましょう。では浦さん。
浦：私はこの年になって、ようやく日本語の美しさ、日本の詩の表現の奥深さが少しずつ判ってきたような気がします。ですから、それを大切にして、これからも日本語の美しい歌を歌い続けて行きたいと思っています。
広瀬：さっきの話と繋がるんですけど、自分にとって大切なのものって、よくわからないんですが、例えば大人でも子供でも素人が歌った賛美歌などが、音程が外れたりしてすごく下手であっても聴く人の涙を誘うことがある。その一方、超一流の歌手が歌った賛美歌が、声が美しく技術はすごいんだけど、心を打たない。大切なものは何なんだろう。それは人の心に訴えかける何かであり、それは音楽でも美術でも共通したものだと思うんですよ。

座談会の出席者：左より　橘川琢、小西徹郎、栗栖麻衣子、湯川亜也子、北川暁子理事長
浦　富美、広瀬美紀子の各氏

小西：テーマにしているのは、「人を感ずる音楽」です。よく、「自然が作り上げた芸術」などという言い方がされますけど、僕は自然が作ったものは芸術ではないと思っています。僕は写真も好きで、よく撮りに行くのですが、中華料理屋の換気扇から油がしみ出ている光景とか、それは汚いものかもしれないけど、もしかすると美しいものかもしれない。そういうものを見ていると、人の営みを感ずるのです。
　あとは感情とかそういったものを大事にしたいと思っています。クラシックだとちゃんとひかなくてはならないでしょうが、ポピュラーミュージックなどの音楽では、上手い下手ではないところに決定的なものがあるんですよ。そういうところを

僕は見ていきたいです。皆さんは学校で教えている方もいらっしゃると思いますが、20 歳くらいの若い人より、むしろ子供を教えたいですね。

子供の時から表現することの楽しさや、表現することが学校生活や家庭生活に繋がっていくことを判っていかないと、良い鑑賞者が育たないと思うんです。良い鑑賞者が育たないと、我々のやることはどんどん寂れてしまうわけです。そういうことにも目を配っていくことが大切だと思っています。

中島：聴く人がいないと、発信することの意味が無くなってしまいますね。それは我々音楽家に課せられた大きな課題だと思いますが、その話題は後にまわすことにし、次は橘川さんどうぞ。

橘川：私が作曲や舞台監督など音楽の仕事に携わっていていつも思っていることは、「楽譜の向こうに人がいる」ということなんです。

楽譜の音符も大切ですが、楽譜の向こうにいる人が見えていないと、何も伝わらないと思います。私にとって音楽とは音と感情のコミュニケーションで、演奏の上手い下手も重要ですが、まず感情や感動が伝わるかどうかがより重要だと考えます。そのためには楽譜の向こうに人がいるということを常に認識して、発表するなり演奏することがとても大切だと思います。

北川：ポピュラーは判りませんけど、クラシックの場合は技術が難しくなってしまうんで、そっちに気をとられてしまいがちになるんです。しかし、作曲者がどのような意図で書いたのかを演奏者は理解し、そして感じなければいけないし、その次に聴衆がいるということ。それを聴衆にどのようにして伝えるかということがテクニックだと思います。巷でよく言われるテクニックとは、メカニズムのことでしょう。しかし、そうではなくて伝える方法がテクニックだと思います。でも、まず感じなくてはいけないし、両方必要なんですね。こうすれば人が感動してくれるだろうという計算だけでは音楽にならないし、でも今はそういう演奏が多いですね。

栗栖：私のはちょっと違うんですが、最近の世の中は、戦前の状況に近いなどと言われているのを耳にするし、もしそうなったら音楽をやっている暇もないでしょうから、お腹がすかず、寒さに震えず、安心して何かに集中できる時間が、とても大切だなと思います。

小西：それは、根本的に大切なことですね。

北川：うちの親は戦前からＮ響にいたのですが、戦時中は色々制約があって大変だったのに、定期演奏会はずっと続いたんですね。だからそんな大変な時だからこそ、音楽が欲せられたんだなと思います。でも、普通に言えば、平和な時でないとゆとりを持って音楽を続けることが出来ないし、戦時中に戻った方がいいなどと言っているわけではないですけど。

橘川：最近のことですが、3.11 の大震災の後、自粛ムードの中で、大惨事を前にして自分に一体何が出来るんだろうと悩んだ音楽家が大勢いたと思います。でも一ヶ月くらい経って音楽が聴こえてきた時、あー、大切なものが戻ってきたんだなと、ほのかな暖かさを感じました。どんなに大変な時でも、音楽は大切なものなのだなと、この数年の経験から特に思いました。
小西：3.11 の直後、仕事は全部無くなって死にそうになり、４，５年はバイトでもやって凌ごうかと思ったのですが、１ヶ月くらい経つと応援ソングなどが聴こえてきましたね。このとき思いました。震災による心の傷跡は相当に根深いものだったんだなと。
橘川：そういう時でもというか、そういう時だからこそ、音楽が求められたということで、音楽が頼もしく感じられたとともに、責任の重さも感じました。
中島：では湯川さん。
湯川：大切なものは決められないほど沢山あるのですが、それを探すために人と繋がることが私の心の源になっているのだなと思っています。でも心に余裕がないと、人とコミュニケーションを取ることも出来ないし、また、それを自分の感情のはけ口にしてしまっては、成り立たないことがたくさんあるのだなぁと感じています。音楽もそうですが、大切なものを見つけ出すために、触れあいの中で、日々自分を鍛錬して行かなければならないと感じております。

若者と社会

中島：人と人との絆ということが話題になっていますが、それを人と社会の問題にまで広げて語り合ってみたいと思います。
今の若い人も、内輪な人間関係を大事にするようですが、そこに閉じこもってしまい、そこから抜けだし、広く世の中を見つめようとしないところがあるように思います。我々の頃は、失うことを恐れず、がむしゃらに前に進む生き方をする人がもと多くいたような気がするのですけど、今の若者はどちらかというと、何かを失うことを恐れるためか、生き方が内向きになっているように見えるんです。騙されたり恐ろしいことに巻き込まれたりしやすい世の中であるからかもしれませんが。
北川：登校拒否とか、引きこもりとか話題になっていますが、人との関係を切り開いてゆくための訓練を受けていないんじゃないですか。橘川さんがやったように海外放浪の旅とか、色々な冒険をやるための手段がわからないとか、それを研究してみようという気もなく、引き籠もってしまうんじゃないですか。
中島：私は、登校拒否や、引きこもりに陥った人の中には、人並み以上に繊細な感性を持つ人もいると思うのですよ。自分をなかなか解ってもらえないという孤独な

思いに苛まれて閉じこもってしまうのでしょうけど。でも自分だって人のことを解ってあげていないのではないかと考えられるようになると、一歩前に進めるんでしょうが。
北川：登校拒否だから一概にダメだとは言えないでしょう。そうなったのには何か原因があるのでしょうから。親子の絆が薄いとか、友達と喧嘩しながらでもつきあって行くための訓練をされていないとか。
中島：今度は若い人から話を伺ってみましょう。湯川さんどうですか？
湯川:表面的に見えていることだけを取り上げて全部ダメと教えられることよりも、常識に合わせていく後ろで、何故そうやらなくてはならないのかという疑問を抱いても、それを発信しようと思える場がとても少ないと思います。どんなに小さな社会でも、それを語りあえる場があったり、また一人でも信頼できる人がいれば、一歩踏み出せるキッカケになるのではと思います。
中島：傷ついても勇気をもって前に進んで行くと、新らしい出会いとか、新たな発展があるかもしれませんね。
北川：今は傷ついてもそれを受け止めてくれる人がいると思えるだけの、世の中に対する信頼感がなくなっているんでしょう。まず最小単位の家族が、子供を信じて、例え悪いところがあっても人格的には受け入れてやるということを示さないと、子供は不安になり、そのまま大人になる。そういう人が今は多くなっているような気がします。

人と人の絆について（自分と社会の関わり）

中島：つぎは少し視界を広げて社会について語り合ってみましょう。今は、人と人との絆が脆くなっている時代かもしれませんが、そういう人が集まり社会を作っている。社会には仕組みがあり、それを動かして行く為の政治があり、法律もある。また、社会は時代とともに移り変わって行くものだと思います。例えば私は終戦直後の時代の物がない時代に育ったわけですけど、その頃は、物がなくとも、夢があったような気がします。それから高度成長期を通り、バブルが崩壊して今の時代に続いているわけですが、今の時代の社会は若者が夢を持ちにくくなっているような気もします。
橋川：今を見ていると夢がないが技術はある時代という気がします。自力でCDなども簡単につくれるし、ホールが沢山あるので演奏会も開催出来るし、そのためのチラシなども、昔とは比べものにならないほど安いコストで綺麗なものが簡単に作れてしまう。YouTubeを使えば、自分のコンサートの模様を、アクセスしてくれるかどうかは別として、世界中に発信できる。つまり個人が豊富なツールを持てる時代

だと思います。かと言って、それらのツールを使って身を乗り出して何かをやってやるぞという意欲を持つかどうか別問題で、今は未来への展望ということより、技術が優先する時代に変わりつつあるような気がします。
中島：夢とか希望とかは、自分の内面から生みだすものでしょう。それは、時代のせいだけではないような気もしますが。
橘川：自分の内面に目を向けるにしても、今やりたいことはやり尽くされ、閉塞感を感じている人が多いと思います。それでもやりたいことを探してやろうという人も確かにいます。
中島：同じ時代に生きていても、人それぞれ異なった意識を抱いて生きているのでしょうね。私なんか、今の時代は、今も未来も見えにくくなっているので、むしろ、知りたい、見たいという意欲をすごく刺激する時代でもあるような気がします。
橘川：なるほど、そうかもしれませんね。やることがなくなったという閉塞感を感じる今の状況そのものも、後の世から見たら時代が用意した意味のある舞台なのかもしれませんね。
中島：ところで、若い音楽家のおかれた現実をみると、今の社会は生活と芸術活動の両立が難しくなっていると思います。若い人が経済的に厳しい状況におかれているのは、日本だけの問題ではなく、ヨーロッパを含めた先進国全般に見られる共通した問題だと思います。そういう厳しい状況の中で、若い音楽家の一人として湯川さんは社会との結びつきについてどのように考えていますか。
湯川：まだ社会という大きな問題を考えるほどの経験を積んでいないのですが、私たちの立場だと、どこかに所属していないと、なかなか機会を得られないことが多いという現実があります。音楽団体、音楽教育機関などに所属しているかどうかが、公募や応募の資格になっているケースも多々あります。その一方、自分の意欲次第で、色々なことが出来るという気もしておりますが…。
中島：私など、大学からは足を洗ったつもりですが、それでも大学のかつて仲間たちから助けてもらうことも多いし、関係は切れずに続いていますね。
湯川：そうだと思います。
中島：そうですね。やはり自分の所属というのは大切だし、関係は切れずに続けて行くとして、その一方、新しいつながりを求めて世界を広げて行くことも必要ではないでしょうか。例えば、私など音楽関係の人は周囲に多くいるけど、文学などを語り合う友人は、そう多くない。ですから、そういう人間関係も築きたいと願っています。次は浦さん、所属とか絆についてご自分の経験を語ってください。
浦：所属というのとは少し違うのですが、私の場合、我孫子で音楽活動をしておりますが、コーラスで一番古い団は 30 年過ぎました。お年寄りの合唱団が主なんですけれど、４団体約１５０人の生徒さんと関わっています。殆どが私より年上で、93

歳の方から私より少し若い方までですが、私が音楽を教える代わりに、みなさんから人生について色々学ばせて頂いてます。地域密着型の活動を続けている訳ですが、お陰様で、我孫子で年2回くらい開くコンサートはいつもほぼ満席です。みなさん、とても素晴らしい方々ばかりで、そこで30年積み重ねたことが私にとってかけがえのない財産になっています。また、デイケアセンターやデイサービスセンターも我孫子市内5箇所くらい回っていますが、殆ど言葉もしゃべれないお年寄りが、歌うと涙を流したり、顔をピクッと動かしたりしているのを見ていると、やはり歌を続けてよかったなと、しみじみ思います。

中島：そういう人達は音楽的には素人でしょうが、そういう人達からは人生経験を学ぶことが出来、音楽を媒介にして小社会が築けるということですね。

橘川：私も20代から35歳まで音楽療法手伝いとして7、80歳の高齢者と過ごした経験があるのですが、年は離れていても、その高齢者たちが若かった頃歌った歌を一緒に歌うと、年の隔たりを越えてコミュケーションが成り立ち、お互いに感情を通わせることが出来て驚いた事が多々ありました。それが音楽のありがたさであり、そういう共感体験から人と人との絆が生まれるんだなと思いました。

広瀬：私は八王子音楽院を開設してまだ20年足らずなのですが、音楽院をやるまでは、自宅でピアノや楽典を教えていました。また時々知り合いから受験生の指導を頼まれたりするんですが、特訓して無事音大に合格すると、それで終わりなんですよね。これでいいのか？出来れば、自分が育てかけた子が音楽家として生計が立てられるまで面倒をみてあげたいなと思うようになりました。現実は理想通りには行かないのですが、音楽院を開けば、かつての教え子を講師として雇うことも出来る。スタジオを開けば、そこで若い人に練習やミニ・コンサートを開き経験を積んでもらい、大きなところでデビューするための道筋をつけてあげることが出来る。そういうことを考え、螺旋階段を一歩一歩上るように拡張して行きたいと思い、続けてきました。また、私はクラシックというジャンルでやってきたので、他の音楽のことはあまり知らなかったのですが、ポピュラー系の人など他のジャンルの人にも講師として来てもらい、そこに新しい絆が生まれ、私の知識、経験も広がって行くので、音楽院を開設してよかったと思っています。

　それから、私は八王子に住んでからまだ20年で、地域との結びつきは浦さんには遠く及ばないのですが、コンサートを開いてその地域に長く住んでいる方々を巻き込んで、こういうコンサートもいいなと、思ってもらえるような活動もして行きたいと願っています。

中島：地域との関係は、ヨーロッパでも大事にしますね。私がハーグの国立音楽院で研究していた頃のことですが、コンサートを開くと、いつも同じ席に座っている地元の人がいるっていうんですよ。喫茶店などにも音楽院のコンサートのビラがお

いてあり、安い料金で聴けるので、音楽院のコンサートを楽しみにしている地元の人が多いようでした。

北川：私は埼玉に住んでいますが、「ホールを作るがピアノを安く買えないか、それも舶来のものがいい」などと難題をつきつけられ奔走し、こけら落としには弾いたりしたんですけど、その頃はまだ大学で教えていたので難しかったということがありますが、まだ、それほど地域への貢献はしていません。頼まれれば何でもやろうと思っていますが。

　それから、私は長い間音大で、大学生を相手にして教えて来たのですが、今は、小さい子供が大事だと思います。小さい時にこそ本物を勉強させなければ、大学に来てから直そうとしても、もう遅すぎるんですよ。しかし、私一人で沢山の子供達を教えることは出来ないので、私は受験生より、大人を教えるようにしています。そして、そういう人達に子供たちを教えて欲しいと思っています。そうして行かないと、日本のピアノ音楽はいつまで経っても良くならないと思います。また、力のありそうな大人の生徒さんには、出来るだけリサイタルなどコンサート活動をやるようにけしかけています。一人では無理なら、二人でいいからやりなさいと。コンサート活動をやらないと、上手にならないというか、発展して行かないと思います。ただ、私は門下会というようなものは嫌いで、何かやるなら勝手にやりなさいと言って、私は黒子に徹するんです。たいしたことは出来ませんが、私はそんな風にやっています。

中島：あんまり先生に頼りすぎるとね。

北川：先生が偉ぶったってしょうがないでしょう。日本は伝統音楽の世界では特にそうだと思いますが、徒弟関係が強いですね。そういうことに拘らず、もっと自由で開放的になるといいと思います。

広瀬：今は、私よりずっと若い 30 代 40 代の人でも、お互いに先生と呼びあうんですよ。私なんかそういう中に入って行けなくて。

中島：「先生と呼ばれて喜ぶ馬鹿もいる」なんていう言葉がありますが、学校関係だけでなく、政治家もお互いに「先生」と呼び合うことが多いようですね。先生という呼び方には尊敬の念が含まれているので、気心がしれない相手とコミュニケーションする場合でも、相手を傷つける恐れが少ないからかもしれませんね。

広瀬：便利な言葉ではあるんでしょうが。

中島：では、小西さん。貴方は音楽の枠を越えて色々な形で社会にアプローチされていますが。

小西：そうですね。ミュージシャンだと、他のミュージシャンのことを“あいつはライバルだ”などと言いますね。しかし、僕にとっては絵描きも、スポーツ選手もみんなライバルなんですよ。音楽だけしか見ていないとチャンスを逃すことが多い。

例えば、県とか国にイベントの開催を働きがけるとする。そうすると「音楽もいいが、今度はサッカーでやろうと思っているんですよ。」なんてことになり、採用されれば入る筈だったお金が入らなくなる。だから相手が「サッカーをやりたい」といえば、では音響はどうかとか。「子供向けのワークショップとしてお絵描き大会をやるんだ」と言われれば「音楽大会はどうですか」などと、色々なことを広く見渡しながら発想して売り込んで行かないと、チャンスを逃してしまうんです。失礼ですが「音楽家です」とか「画家です」という人には興味がなくて、デザイナー、ディレクター、プロデューサーといった視点で活動している人とつきあうと得るものも多いし、「あいつはこう動いたな、なら先手を打ってやろう」というように競争心も湧いて来ます。私は音舞会の作曲部会に属しながら今は作品を描いていないし、自分の音楽作品を残すためだけに固執していない。例えば文章を書いて、それを読んだ人が小西の言っていることは参考になると言ってもらえれば嬉しいし、それも作品だと考えています。

未来の音楽と社会、そして自分についての展望

橘川：これからは、再び直接的な人との関係がより重要になって来るように思います。例えば今ではCDも売れなくなってきていて、1000枚作れればよい方で、それでもCD店だけでは売れ残ってしまう。伝えようとする我々と、伝えたい聴き手との間の距離が開き過ぎてきていると思うんです。そこで頑張って自ら積極的にコンサートを開き、真剣に聴き手と向かい合い、相互の人間関係を密にして行く。そうして行くと、その人を見、その熱演を聴いて感動した人が、その感動をお土産として持ち帰るためにCDを買って行くということも実際にあるんです。演奏会を通じて聴きに来てくれた人との関係を丁寧に、丁寧に掘り下げて行くことが、一緒に音楽の未来を切り開くことにつながって行くような気がします。

中島 洋一（本誌編集長＆司会）

中島：それから、自分たちが知らない人、まだ会っていない人の中にも、自分たちを理解してくれる人がいるかもしれない。骨が折れてもそういう人を探す努力も必

要ですね。そのためには、いままでつきあいが薄かった団体や集団を含め幅広く働き掛けて行かなければならない。
広瀬：それが、日本音楽舞踊会議、『音楽の世界』の役割であり、そのために会があるのだと思います。
中島：その通りですね。
広瀬：我々がいままで行って来たコンサートなどの活動を、より充実した形でこなして行くことで、より魅力的な会になって行けるし、そのことは、未来の音楽社会を切り開いて行くことと、会の発展に繋がって行くのだと思います。
北川：今はCDを買うと、生の音楽を聴く必要がないと思う人もいるようです。
広瀬：YouTubeで聴きたい曲だけを聴いて満足してしまったり。
北川：録音されたものを聴けばいいというのは違うと思います。CDなどの普及が行き着くところまで行けば、少しは生に戻ってくるかもしれない。しかし、まだそこまで行っていないように思います。
橘川：そうですね。
北川：CDを流行らせたのは、グレン・グールドなんかだと思うんです。私もCDを作ってくれと言われて作りましたが、あまり作りたくない。私がやりたく、そして聴いて欲しいのは生演奏です。
橘川：そのことと関係する話ですけれど、私の知人がプロデュースしてある大規模コンサートを開いた時、「こういうコンサートを開くならば、ＣＤなど録音したものからでは決して得られないものを提供しなければならない。そうでないとこういうコンサートを開く意味はない。」と厳しく言っていました。その通りだと思います。

ネット社会の中における情報発信と『音楽の世界』存続の意義

中島：今は、ＣＤなどの録音メディアに代わり、インターネットを通して発信された音楽や動画をパソコン、スマホンで聴ける時代になりましたが、それらが生の演奏、生の舞台でないという点は、ＣＤやＤＶＤと同じですね。
　ところで『音楽の世界』は季刊化しますが、いまのネット万能の時代に紙で配付する雑誌は時代遅れだから存在理由がない、といわれたことがあるんですよ。しかし、昔を振り返ってみると、テレビが急速に普及した頃、一億総白痴化などといわれた。サンプラーなど生楽器の音色をコピーして演奏する電子機器が出現したとき、電子楽器が我々の仕事を奪うといって音楽家達が訴訟を起こしたことがあるんですよ。しかしテレビ普及後、読書の機会は少し減ったかもしれないけど、人々は本を読み続けた。電子楽器やコンピュータによる音楽は新しい表現世界を付け加えたか

もしれないけど、生演奏を駆逐することはなかった。ネットにも似たことがいえるように思います。年配の方には、スマホンに夢中になっている若者について、やがてスマホンも古くなる。などと批判する人もいますが、スマホンは単なる媒体であって、スマホン（パソコンも同じ）の向こうには、ネットという無限に近い広い世界があり、若者が興味を持つのはその世界の方です。誰でも簡単にその広い世界に飛び込むことが出来、その世界に向けて自由に発信できる。しかし、ネットは情報が溢れる世界であり、とかく情報の渦に巻き込まれ、認識や体験を深めにくい。しかし、本が与えてくれるのは情報だけでありません。評論家の立花隆氏が本は、知、情、意の総合体だと評していますが、本を通して作者やそこに書かれた人物の行動や思いを追体験でき、それにより自分を変えることも出来ます。つまり読書は、クリエィティブな行為でもあるのです。

橘川：私もネットをやって情報を集めることはよくやりますが、Amazon などで情報を集め、そこで買うのはアナログの本だったり CD だったりします。最先端の技術を使って、アナログを求めるという例です。

読書から作者の人生の追体験とともに、さらに自分の人生の要所要所で読み返すごとに、自身を振り返り、本についても自己についても認識や理解をより深めることができると思います。またこれは私個人の感覚的な話になりますが、本は、紙の経年変化や本についた細かな傷とともに自分の人生のますます貴重な宝物になってゆく思いさえ覚えます。私も本がなくなることはないと思います。

中島：ただ、先ほどのコンサートの話と同様、本がネットと同じ土俵で勝負したら勝ち目はない。速報性という点ではネットに遠くおよばないでしょう。しかし、じっくり腰を据えて、ものの本質に迫ろうとするには、やはり本の方がよい。ところで電子書籍は紙の本とは媒体が異なるが、私は本の範疇に含めています。内容が不変で、紙の本と同様じっくり読み返すことが出来ますから。

自分が拘りたいこと、そして自分にとって譲れない線とは

中島：時間が残り少なくなりましたが、自分が一番大切にしているもの。そしてこれだけは譲れないというものがあったら話してください。

北川：私はずっとそうだったんですけど、私には音楽しかないし、私が生きている限り音楽を捨てることは出来ないし、捨てることはないと思います。それが私の拘りであり、譲れない線です。

小西：これは僕だけかもしれませんが、譲れないものというものがなくなって来たような気がします。僕の音楽を聴きに来てくれる人が多くなれば嬉しいが、「これが自分の音楽だから聴け」と自分に拘って、押しつけようという気持ちはなくなり

ました。評価は第三者に委ねればいいし、水の流れに身を任せて、流れついたところで一生懸命がんばる、それでよいと考えています。
北川：しかし、自分が演奏する限り、以前より良い演奏をしたいと思います。大勢のお客に来てもらうことが本当の目的ではなく、評価は第三者に委ねるとしても、聴き手に向かって、自分が信ずる音楽を奏でる。それが演奏する側の責任であり、拘りだと思います。
中島：では湯川さんは何に拘りたいと思いますか。
湯川：目指したいことは、自分に素直であり続けることでしょうか。言葉で目標をいうのは難しくないかもしれませんが、いざ、それを実行するとなると壁にぶつかって悩むことが多く、そういう時こそ素直にいられないと、人にも嘘をついてしまうことになるのかなという気がします。
橘川：私の場合は音楽面と日常生活それぞれに拘りがあって、音楽面では「継続は力なり」という言葉がありますが、私は「継続こそ力なり」と考えています。どんなに苦しくとも止めずに続けてさえいれば、少しずつでも前に進めると思います。しかし、止めてしまえば、それですべてが終わりになります。
　一方、音楽を含め日常生活の面では、「人には、必要な時に必要な場で必要な人が必ず現れる」ものであって欲しいと思っています。ただ、それに気がつくには、努力して常々感性を磨いている必要があると思います。そうしないとそれに気がつかないばかりか、その出会いを生かせないと思います。
栗栖：ここにいる方々は、ご自分の価値基準をしっかり持っていると思います。しかし、今は音楽を専門にしない方々の価値判断も非常に多く飛び交うようになりましたから、それらも意識して聞き入れると同時に、しっかりとした自分の価値基準を持ち、惑わされないようにしたいと思います。
中島：つまり安易に周りに流されないような、強固な自分を築いて行きたいということですね。では、広瀬さん。
広瀬：実は小西さんが話された時、すばらしいことをおっしゃると思いました。つまり「流されて行く」ということの意味がこの年になってだんだん解ってきました。
小西：つまり、そうなったとこところから、いままで自分が気がつかなかったものが見えて来ると思うんです。
広瀬：私流にいうと、「没我」ということなんですね。自分をどこまで捨てることが出来るかが私の拘りです。それが音楽の中で出来た時に神様が許してくれるかなと思うんです。自分がこう表現したいとか、自分がいい演奏をしたいと思っているうちは、それが出来ない。そこで自然体でいられれば、そこで死んでもいいかなって思うんですよ。

中島：シューマンが母に宛てた手紙で「極限の自我と極限の非我は、結局同じ所に到達するのではないでしょうか」と言っています。
広瀬：幾つの時ですか
中島：確か１８歳の頃だったと思います。「極限の自我」とはとことん自分に拘ること。つまり、とことん自分に忠実であろうとすること、「極限の非我」とは自分を空しくすること、自分を完全に捨て去ることです。１８歳の青年が書いたとは信じられないほど、深い意味を持った言葉です。
広瀬：仏教の言葉に「他力本願」「自力本願」という言葉がありますが、若い頃は「他力本願」という言葉の意味を悪い方に捉え、人に頼ってばかりいてはダメだ。自分で頑張らなくては、と思ったりしたんですが、まったく逆で、人様の力を得てようやく自分は生きて行けるということが「他力本願」であって、自分が本当に没我になれた時、人様に生かしてもらえるのだと思います。音楽の世界で、少しでもそういうことを感じさせる人間になれたらいいな、と思っています。
中島：では、最後に浦さんお願いします。
浦：橘川さんが継続こそ力なりとおっしゃっていましたが、私の思いも同じで、地元でこつこつ続けて来たことを元気な限りというか、生命ある限り、続けたいと願っています。続けていると目に見えないものを色々戴くのですね。私は健康にも恵まれ、３０年間のうち休んだのは母が病気で入院して亡くなった時の１回だけなんです。みなさんから学ぶことが沢山あるし、育てて頂いたと思います。生命ある限り続けて、死ぬとき「良い人生だった」と思えるようにしたいこと、それが私の拘りです。
中島：みなさん、今日はそろそろ時間です。ありがとうございました。今日は座談会ということでお話しを伺いましたが、こういう集まりを持つことはお互いにとって、とても意義深いことと思います。今日は人の絆、つながりということが重要なテーマとなりましたが、同じ会に所属してこういう会合が持てるということこそ、「絆」のありがたさだと思います。
では、今年もよろしくお願いします。

2014 年 12 月 12 日（金）高田馬場、日本音楽舞踊会議事務局で収録
文責：中島 洋一

未来の音楽人へ（１９）　　ピアノ：八木　宏子

第２次世界大戦の非常に厳しい終戦直後に、私は８才でピアノを始めました。戦争が終わった喜びで希望に燃え、親は子どもたちに音楽の世界を経験させたいと思ったのでしょう。
多くの子どもが、ピアノがなくてもレッスンに励んだのでした。ということで、音楽人の理想的なスタートではありませんでしたので、私の来世ならどうする、または現在の反省面を含めてお伝えすることにいたします。

厳しい状況下のピアノレッスン

《写真１》　前列真ん中の先生から右へ２人目が著者

小学２年の担任の平井淑子先生が、「ピアノかダンスを習いたい人いますか？」の質問で、子どもたちのピアノ指導が始まりました。ピアノの先生はレオ・シロタに指導を受け、リスト弾きで鳴らしたという先生。ダンスの先生も振り付け上手の水準の高い先生で、今では考えられない、生徒には幸せな先生の配属です。発表会の先生の模範演奏で、リストのハンガリア狂詩曲第２番、第６番をお弾きになった昔の色あせたプログラムが残っています。（写真１，小金井小学校での発表会。私はバイエルの 16 番を弾いた）指導は練習曲が主体で、１年に１度の発表会に曲をくださり、毎日ホール等で発表。６年生の時、コンクールを受けるため３人の生徒がシューベルトの即興曲 Op.90 の２を準備し、先生に連れられて国立音楽大学教授の属澄江先生のお宅へ聞いて頂きに行きました。

ピアノのない練習は、私の母の叔母からオルガンを借り受け、中学の時には、子どもたちは放課後音楽室へ集まり 10 分交代の練習。他の子たちは傍らで楽しく遊んでいました。今の子どもの生活とは全く違い、のどかなものです。中学３年の時にピアノを買ってもらい、その年には、NHK 番組“声くらべ、腕くらべ”の各都道

府県代表が１月 15 日の祝日に放送しました。私は東京代表でショパンのエチュード「黒鍵」を弾き、「NHK」名入りのシャープペンシルをもらい、子ども心に大事につかっていました。今から比べると随分水準の低いものですが、小学生から中学生頃までは技術の伸びが、他の教科も同じように、９年間は進歩が大きい年代だと思います。ピアノの場合の、この借りながらの練習でも、ささやかながらも継続により技術は保って行けるのでしょう。

２つの生き方

積極的な人生を自らの力で、切り開いていく生き方と、チャンスを受け止め、それを発展させる受け身の生き方とあると思います。それには性格が現れるのでしょう。

私の友人で、プロの画家ではないのですが、絵の指導の先生選びに本屋の画集で見付け、電話で指導をお願いし、ある程度身に付くと、次の先生も画集で見付けるというやり方で、自宅をギャラリーの個展のように並べて楽しんでいます。私はびっくりしました。

私事で、恐縮ですが、私の主人は「アフリカのために働きたい」という信念をもっていましたので、常にカバンの中に履歴書を潜ませ、就職しても自分の希望に近づくようにいつも心がけていました。２つのチャンスが湧いたときもあり、私は横で見ていて、なかなか面白いと思ったものです。

一方私の方は受け身の生き方で、降って湧いたチャンスを生かす生き方で、主人のアフリカ行きに便乗しました。

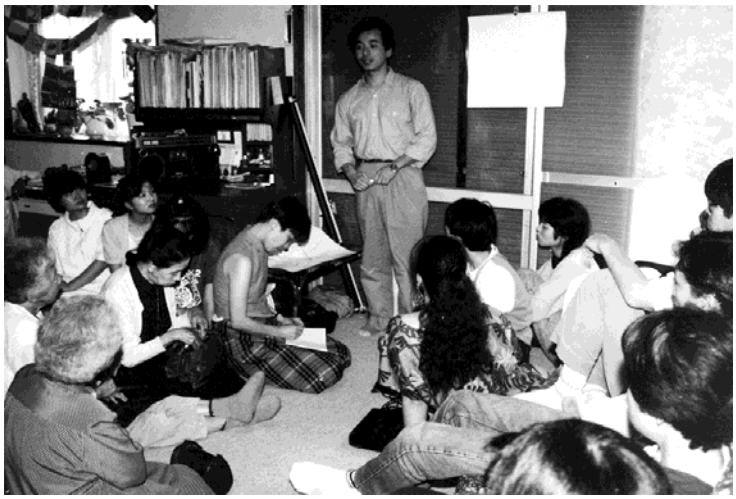
アフリカで学ぶ

《写真２》島田美佐子さん（左）と著者

ケニアに長く住む岸田夫妻と知り合い、岸田夫人提案でチャリティーコンサートを始めました。地方巡業がアフリカ的独特なコンサートでしたから、40 代になかなか面白い人生が始まったと思いました。
1984~1990 年ほぼ毎年開催し、岸田夫人が現地を準備し、私はリサイタル・プログラムを用意し、同じ曲を日本でのリサイタルに生かしました。（写真２。フラミンゴで有名な町ナクルの教会で）

コンサートと平行して、1985 年に設立の救援活動「少年ケニヤの友」（孤児救済）の事務局を 12 年努めました。いつも現地から発端を起こし、昔の女学校の中古ミシンを棄てる寸前に日本からの情報を得て、次に私の事務局が輸送関係と交渉など今までにない経験をしました。会設立翌年に東京支部の仲間が話し合

い、アフリカを身近に感じるために理解を深めましょう、と我が家を会場にし、ケニアで知り合ったアフリカ研究の専門家の先生を講師にお招きし、30 人位お客様を集め、「アフリカを知る」セミナーを開催しました。一ヶ月毎に開き、27 回やりました。ディナーパーティーで夕食を共にしながら膝突き合わせで先生とお話し、皆さんとても楽しかったようでした。「ピグミーチンパンジーの性と社会」と題した京都大学の古市剛史先生のセミナー（写真３）の時は、50 人のお客様。会終了後も連絡が入り、「残念ながらそれはもうすみました」ということで、なかなかの人気でした。セミナー初会から出版を考えていましたが、アフリカの本は売れないので、出版社が取り上げてくれません。14 年かかってやっとスリーエーネットワーク発行がきまり（２刷で 2500 冊売れ、絶版）、「アフリカを知る」が世に出ました。１５人の著者の先生は水準の高い先生方ですから、いい本ができました。日本全国のほとんどの図書館に入り、アフリカ理解が拡がった事に満足しました。



《写真３》立っているのが古市剛史先生

大自然と動物

ナイロビから車で約 20 分。大地の裂け目で有名な大地溝帯の雄大な眺めに出会います。700ｍの崖の淵に立つと、前方サバンナで、月世界のような光景。なにもかも忘れ、大自然のスケールの大きさに打たれます。ケニア・ウガンダ・タンザニア・ルワンダ・ブルンジ・コンゴ・マラウィ・モザンビークの国々に達する巨大な構造地形です。このケニアの部分を眺めただけで旅の目的は達成したと思えるほどです。動物は豊か。毛並みが美しい。目を見ると何か話しが通じるような錯覚を覚えます。人間が生きるには動物との共生が自然であり、自然の中で動物と度々出会うと自ずと人間性回復で、自然に還るのではないでしょうか。アフリカの国は国によっても違うでしょうが、ケニアの人々は人なつっこく、度々ケニアに出掛けた我々夫婦は、この環境に揺さぶられ、無口がケニア人のようにおしゃべりになりました。一種の刺激療法になったのでしょう。音楽の面でも素直に感ずるままを表現するという姿勢に成ったかも知れません。

音楽創り

長い間音楽に携わって来ますと、重要なポイントに焦点を絞って見えて来ます。私が考えますことは、音楽表現は多岐に渡っていますので、アンテナを張り巡らし、いろいろの事から刺激を受け、音楽性を高める生活を常日頃から心がけ、作品に向かったら自分の納得がいくまで追求することで水準を上げて行く。次の段階でレパ

ートリーを広げる。深い追求を会得すると次には又その位置を求めたくなると思います。

菊池寛は「世界にあるたくさんの古典を１冊３回読むこと」とおっしゃったとか。これは作家になるには、なのでしょうが、音楽家の場合では一曲を公の場で３回演奏する、をまず目標にしたらどうでしょうか。もちろん度々演奏することが理想でしょうが。その都度新しい発見がありますし、だんだんゆとりも出来ていい演奏に成って行くことでしょう。これは演奏の場を見付けることが、文化に理解のない日本では厳しいです。私は残りの人生が短いので、来世に託します。若い方、頑張って日本の文化を高めて下さい。

小学生との交流

《写真４》　後列左から３人目が筆者

稲城第２小学校に寄贈されたピアノのお披露目コンサートに、黒髪紀子さん（元音舞会作曲家会員、故黒髪芳光氏の夫人）のマリンバの伴奏を頼まれ、10 月 28 日に開かれました。黒髪さんが、子どもたちが元気のいい声で歌える「トレミの歌」とか、「おさんぽ」を含め、ポピュラーな７曲のそれは楽しいプログラミングで、子どもたち約 100 人、父兄も参加していいコンサートになりました。「主旋律以外も聞こえて来ました」とか「弱い音、強い音がありました」と感想があり、カザルスの「鳥の歌」も静かに集中して聞けました。私の方からも「皆さん、人は出会うと仲良くなりますが、皆さんの家庭で楽器のアンサンブルをやるととても楽しくなるように曲が作曲されています。音楽で楽しみましょう」と。後ほど写真入りの感想文集が届きました（写真４）。１年生のたどたどしい文字から、６年生の漢字まじりの文章まで、先生のいいご指導が読みとれます。さっそく「又お会いしたいですね」と大きな字で、仮名も振り、手紙をしたためました。後から、コンサートの反応が聞こえてきました。音楽の先生が、バッハのアリオーソを聞いて涙したそうです。バッハのしみじみとした音楽に感謝すると共に、私たちの橋渡しの音楽で功を奏した結果に、喜びが湧いて来ました。今後もこの心に届く演奏を目標に励むことにしたいと思います。

（やぎ・ひろこ　　本会　ピアノ部会員）

電子楽器レポート　連載-21

ハイブリッドオーケストラによるオペラ

―熊本オペラ芸術協会と韓国室内オペラ団の事例を通して―

研究：阿方　俊

熊本オペラ芸術協会と韓国室内オペラ団が、昨年、ハイブリッドオーケストラでモーツァルトの「魔笛」を上演し、新しい演奏形態の将来的可能性を示した。前者は10月、熊本市民会館崇城大学ホール（1,579席）、後者は12月、韓国オサン市文化芸術会館（860席）。

今や日本ではめずらしくなくなったエレクトーン（ヤマハ製電子オルガンのブランド名）を用いたハイブリッドオーケストラによるオペラは、韓国、台湾、中国などでも上演されるようになってきている。

ハイブリッドという接頭語は異なった種類のものを混合するという意味で用いられ、ハイブリッドカーの場合はガソリンと電気という異種のものを混合したエンジンを搭載した自動車を指す。ここでいうハイブリッドオーケストラの場合は、アコースティック楽器（伝統楽器、生楽器）と電子楽器（エレクトーン）によるアンサンブルを指す。

この異種混合のオーケストラが用いられる理由には次の3つが挙げられる。

① オペラ上演ではステージ、照明、オーケストラなどに多額の経費がかかり、オペラ団体ではハイテク技術を駆使して各分野での省力化に尽力している。オーケストラ分野での省力化策の一つとしての活用

② 今回の熊本オペラ芸術協会の「魔笛」は「異空間オペラ『魔笛』～肥後くまもと魔法の笛～」と異空間を謳っているが、この異空間対して異音響と言ってもよいハイブリッドオーケストラによる新しい響きの活用

③ 電子オルガンなど電子発信の楽器は、すべての音がスピーカーを通して出てくるため、アコースティック音と厳密な意味で同じ響きにはなり得ない。しかしアコースティック楽器音を電子音に加えることで、よりアコースティック楽器の響きに近い音が得られることによるハイブリッドオーケストラの活用

かつてエレクトーンを見たことのない北ドイツ放送交響楽団のヴァイオリニストがエレクトーン2台と弦楽器5名のアンサンブルをDVDで聞いて、“なぜ20～30人の弦楽アンサンブルのような響きがするのか”と質問したことがあるが、この反応がハイブリッドオーケストラの特色を端的に言い表している。

この2つのハイブリッドオーケストラの楽器編成は次のようになっている。

写真左は、熊本オペラ芸術協会ハイブリッドオーケストラの練習風景（指揮：出田敬三）
同右は韓国室内オペラ団のリハーサル時のオーケストラピットでの演奏風景（指揮：金正奉）

	Electone	Strings	Wind & Perc.ほか	備考
熊本オペラ芸術協会	3 名	6 名	17 名	演奏者＝26 名
韓国室内オペラ団	2 名	6 名	1 名（Flute）	演奏者＝9 名

ハイブリッドオーケストラの楽器編成は数名の小さなものから管弦打楽器が加わる 20 名を超すものまでいろいろなタイプのものがある。この 2 つも演奏者の人数が 3 倍近くも違い、不思議に思われる方がいるかも知れない。それは各オペラ団のオペラ上演に際し、ハイブリッドオーケストラに対する基本的考えが違うことに起因する。

熊本オペラ芸術協会では、弦楽器セクションのみをハイブリッドストリングスにして、管打楽器は原曲の編成のままで、現代的な 2 管編成のオーケストラを追求したものであり、3 名のエレクトーン奏者は次のように弦楽器を分担し音の広がりを求めた。また弦楽器 6 名の中にコントラバスだけを 2 名配置しで管打楽器とのバランスを取った。

第 1 エレクトーン（中村真貴）＝ 第 1 および第 2 ヴァイオリン
第 2 エレクトーン（川元慶子）＝ 第 2 ヴァイオリンとヴィオラ
第 3 エレクトーン（本田真弓）＝ チェロとコントラバス（第 1 バイオリン兼任）

これに対して韓国室内オペラ団の場合は、2 名のエレクトーン奏者（ウォン・ヘリン、千葉祐佳）がスコアリーディング奏法で弦楽器と管打楽器を分担して演奏するものに弦楽器奏者 6 名を加えたものである。ここでの狙いは、電子音（エレクトーン）の弦楽パートをよりアコースティックサウンドに近づけるという点にあり、弦楽器に第 1 ヴァイオリンが 2 名加わった 6 名で、前者と対照的になっている。

もうひとつ挙げられることに、前者が弦楽器音をマイクで軽く拾っていたのに対して後者はマイクを用意したもののゲネリハで使用しない結論に達した。これは、熊本市民会館の 1,579 席のキャパシティに対しオサン文化芸術会館が 860 席であり、

ハイブリッドオーケストラでマイクをどのように使っていったらよいか、客席数なども考慮して今後の課題になると思われた。

真左：熊本オペラ芸術協会公演のオケ練　写真右：韓国室内オペラ団公演のカーテンコール

かつて日伊音楽文化交流―音楽の虹フェスティバル―で、ハイブリッドオーケストラを用いてプッチーニの「修道女アンジェリカ」が上演された時、ヴェルディ音楽のマルチェッロ・アッバード元院長が“オケの演奏がはじまった時に、少しいつもと違うかなと感じたが、幕が上がり、舞台でコーラスが歌いだすと、違和感はまったく感じられなくなった。これならオペラに世界でもっともうるさいイタリア人も容認するだろう”と感想を述べた。オーケストラとハイブリッドオーケストラの違いだけに耳を傾けるのであれば別であるが、今回、この２つのオペラを観て改めてアッバード院長のことばが想い出された。

またオサンの「魔笛」を観たヤマハ・ミュージック・コリアの山田俊一社長は、“ハイブリッドオーケストラによるオペラの話しを耳にはしていたが、このようなエレクトーンの発信の場があることを改めて認識した。今後、新しい動きを考えて行きたい”とこの楽器のハイブリッド的使用法の可能性に意欲を示した。

と同時に、会場のキャパシティに最適な楽器編成やマイクの使用法に関する課題などが多々残されていることも事実である。しかし、ハイブリッドオーケストラがオペラ公演で大きな一歩を着実に踏み出しているのは間違いない。

（あがた・すぐる　本研究会員）

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆

『音楽の世界』12 月号の訂正

5Ｐ 18 行目

困難な課題を背負い込むもので**もの**あろう　【誤】

↓

困難な課題を背負い込むものであろう　【正】

歌の道・我が音楽人生（11）

～プロ室内合唱団「日唱」と共に半世紀～

室内合唱団日唱代表久住　祐実男

第１部＜音楽大学時代＞ＸＩ

この「音楽の世界」が、50 年続いてきた事は奇跡に近いと言えるのではないか。主催の日本音楽舞踊会議の方々の献身的努力があったからに他ならない。それでも来年 2015 年からは季刊となって年４回の発行で続けられるという。

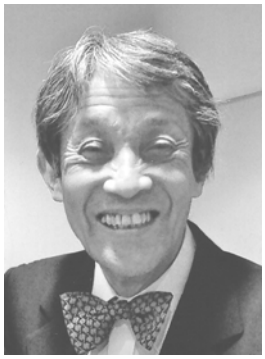
さてこの我が音楽人生もあまりのんびり出来なくなった。私の音大時代の最後はクラスメイト約 20 人で東京混声合唱団を作ろうと毎日相談して、昭和 31 年の 3 月 31 日に日本青年舘で発足のコンサートを開くところまで漕ぎ付けた。さあそれからがどうやって食ってゆくかが大問題だった。私は先ず後援会を作ってなんらかの形の援助に繋げられないかと、後援会つくりに奔走した。幸い私の小学校の同級生の父親が第一生命の社長だったり、服部セイコーの社長だったり、私の父の学友の三井銀行の社長だったりしたため、第一生命の矢野一郎さんが中心になって、後援会を作って下さった。そして、第一生命ホールを東混の演奏会のため殆ど無料で使わせて下さったり、関連企業からのイヴェント出演の依頼を紹介して頂くなど、色々な援助や便宜を図って下さったのは大きな支えとなった。

勿論当時のマネージャーの努力もあり、少しずつ仕事をするようになった。

この様に東混は曲りなりにも合唱団の活動を始めた。しかし団員の収入は少なく生活は苦しく、良い就職口があれば、そちらに移る者も後を絶たなかったのも止むを得なかった。

こうして 6 年が経った。東混のマネージャーが打ち出したのは 30 人の団員を倍増させ、当時増えてきたマスコミ関連の仕事を消化しようとした。演奏の質の低下は明らかだった。6 年前理想の合唱を目指して始めた意義を思い出し、増田順平君を中心に新しく理想の合唱団を創ろうと、日夜、当時私の住んでいた原宿のアパートで、協議を重ねた。この時私は皆にお茶代わりにいつもカルピスを出したので、誰言うことなく、このアパートを「カルピスホール」と呼んだ。カルピスホールの協議も大詰めに近づき、多くの音楽家とも意見を交わし、昭和 38 年 3 月 31 日 2 時に記者会見を開き、東混を脱退し、新たに 20 名でプロの室内合唱団「日本合唱協会」を設立、発足した事を宣言した。翌日の新聞は、＜東混分裂・プロ合唱団「日本合唱協会」発足＞の活字が各紙面に躍った。第 1 回演奏会（デビューコンサート）は 1963 年 9 月 17 日共立講堂に決まった。特記すべきは全曲指揮者なしの演奏だった、

これには多くの秘話がかくされてあった。（つづく）



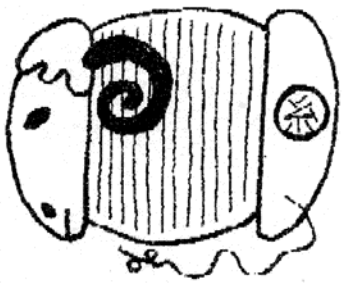
久住祐実男（くすみ・ゆみお）プロフィール

東京藝術大学卒業。在学中は声楽をリア・フォン・ヘッサートに師事。指揮法を渡辺暁雄と山田一雄に、和声法を下総皖一と石桁真礼生に師事。卒業後は指揮と和声法を小船幸次郎に師事。1963 年、仲間 20 人で、究極のアンサンブルを目指してプロ室内合唱団「日本合唱協会（日唱）」を創立した。1973 年には音楽教室「日唱ミュージックアカデミー」を設立し、クラシック音楽の普及に努める。現在日本合唱協会代表及び指揮者。日唱ミュージックアカデミー校長。日本演奏連盟会員。

連載　**音・雑記－ひなの里通信**（74）　狭間 壮

未の年、思い出すことども

もういくつ寝るとお正月、歌って日を過ごすうちに元旦。続いて歌うのが年の始めの例（ためし）とて。子どものころの年末年始だ。この唱歌「お正月」や「一月一日」を無邪気に歌わなくなると、さてこの 4 月から中学生。少し大人気分の 12 歳。干支（えと）の年で迎える正月だ。私の干支は「未・ひつじ」。



羊の絵柄に、「今年は僕らの年、がんばろう！」など感嘆符をつけて年賀状が届く。いよっ年男！力はいってるね。

なんのことはない。社会人になっても「今年は我等の年、何かとがんばろう！」の年賀状だもの。どうやら干支は、世代（年齢）には関係なく、ある種の感興をもたらすものらしい。私も同様だ。

2015 年、私は 72 歳。6 度目の羊の正月を迎える。まずはめでたい。

20 世紀前半に活躍した名ゴルファー、ボビー・ジョーンズの伝記映画に印象深いシーンがある。そこでの母親の言葉。主人公ボビーは、病弱な少年。なにくれとなく励ます母親。

「中国では 12 年周期で、年々に動物の名前がついてて、その動物の特徴が、その年生まれの人の性格にまで影響するの。ボビーは寅の年、タイガー。人の上に立つ性格。怒りっぽいところもあるけど、困難に打ち勝ち、夢をかなえるのよ！」と、こんな風だ。

アメリカは多民族国家。しかし中国の十二支、干支の文化が、一部（？）とはいえ、普及していたことに驚いた。

それにしても、「干支の動物とされたその特徴らしきものが、人の性格にまで反映される」なんて、あり？　と言いたいところだが。でも、それを励みに病弱な少年が、長じて伝説の名ゴルファーになるのだから、彼には有益な話であった。

母親の話に、羊は登場しなかった。もし出ていれば、「迷える仔羊」の連想から、主体性なく軟弱などと決めつけられかねない。まずは、イメージ。少年の干支が、タイガーでよかったというものだ。

干支の思い出話のつづき。私のリサイタルのプログラムに、バリトン歌手、友竹正則氏のメッセージをいただいたことがある。文中こんなくだりがあった。

「未歳生まれの男同志は相性が良い、なんて世に言う。昭和 6 年生まれのぼくと、同 18 年生まれの狭間君とは、そのせいかあらぬか、甚だ仲がよろしい。」

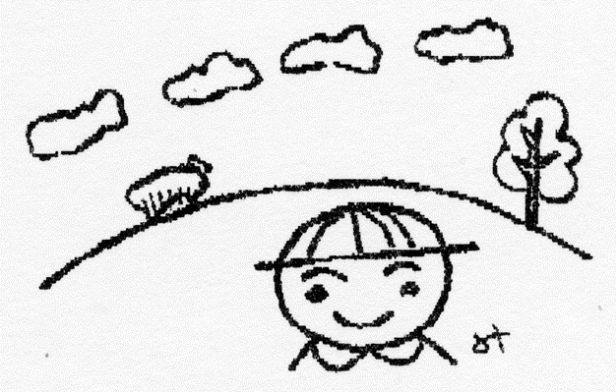
未歳生まれの男同志が、相性が良いなど聞いたことがない。「世に言う」とは、世間周知のことなのか？「そのせいかあらぬか甚だ仲がよろしい」ともあるが、その典拠となる諸々、未だ不明。

思うに我田引水。先のボビーの母親も友竹先生も、自らの思いにことを引き寄せ語ったのだろう。人を励まし喜ばせよ

うとする言葉や行為は、洋の東西を問わずだとして、その一件、落着としょう。

友竹先生からは、いろいろ学んだ。また重なるレパートリーもあり、なかでも同じ未歳の歌、「野の羊／詩・大木惇夫、曲・服部正」では大いにもりあがり話は発展、ジョイントリサイタル「羊の歌」をとなった。プログラムは日本歌曲で構成。始めと終りは、それぞれの「野の羊」を挨拶がわりに歌うと決め、詳細は後日に。64 分 15 秒の電話を終えた。就寝前の一刻。話題はつきず、日付が変っているのにも気づかなかった。

その 4 日後、友竹先生の訃報が届いた。享年 61。「日本人が、日本のうた歌わず、誰が歌う！」が、先生の口ぐせ。日本歌曲への思い入れ、また詩人（ペンネーム友竹辰）であればこその、詩の読みの深さや表現力に、強い感銘を受けた。大きな先達を失ったはぐれ羊 stray sheep！の思い、無念がつのる。



もう一つ忘れられない思い出がある。「野の羊」を歌った、幼稚園のコンサートでのことだ。詩人（この歌の作者）は、「野っぱら」で羊を見てる。「一人ぼっちで、さびしそう。でも、うらまない目をしてるじゃないか。そういえば、俺も羊のうまれだな！」と、なにやら共感。そして「野っぱらはいいな　さびしくていいな」の感慨にふける。初夏の陽光の中、羊の背にコブシの花影が揺れて、おだやかな午後だ。

歌い終えた。園児の一人が手をあげる。「どうして『さびしくていい』の？」返答に窮し、「おとなになったらね、わかるよ」などと応えてみた。24 年も前の、未の年のこと。湾岸戦争があって、たくさんの犠牲者が出た。親を失い、さびしい子ども達がいっぱい。テレビの向こう側からの、その悲しげな目指に、私は胸ふさがれる思いであった。子ども達だって、ゆれる心でその画面を見つめていたに違いない。そんな年だった。

「さびしくていいな」などは、平和の時なればこその感慨。あの時 5 歳だった園児は、男の子。どうしているだろう。お父さんになっているかもしれない。未の年。平和な正月を寿ぎ、思い出すことども。庭にやってくるジョウビタキの年賀の挨拶を聞く。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま　たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

【挿絵】武田 光弘（たけだ　みつひろ）

名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第55回〕

2代目モーツァルトの運命

楽聖ベートーヴェンに、同じルートヴィヒという同名の身内がいた。しかし音楽家にならずにサギ師になったという話は、確か23回目にご紹介した。ところがベートーヴェンの先輩にあたり、若い頃の彼が逢ったこともあるW.A.モーツァルトにも、じつは同名のモーツァルトがいた話は、もしかしてまだ知らない人がいるかも知れない。こちらは単なる身内でなく、正真正銘、モーツァルトの子供である。どんな人物で、どんな運命を辿ったのか、ちょっとご紹介してみよう。

天才モーツァルトは、1782年26才の時にコンスタンツェ・ウェーバー（歌劇「魔弾の射手」で知られるウェーバーの親戚筋にあたる）と結婚し、6人の子供（男4人、女2人）をもうけた。このうち4人は幼くして亡くなり、成長したのは次男のカルル・トマスと4男のフランツ・クサヴァー・ウォルフガングの2人だけである。

カルル・トマスは1784年に生まれ、父親が亡くなった時には7才。可愛がられはしたが前後して生まれた兄妹たちが次々と亡くなったりしたために、音楽の手ほどきを受ける間もなく、プラハにいた父親の友人フランツ・ニーメチェックに預けられてしまう。そして彼のもとで育てられながらピアノの勉強をしたが、14才の時になぜかイタリアへ行く。ここで商社員として働いたりピアノの販売業をやったり、突然思い立って音楽の勉強を再開したりとあれこれやった末、最後はミラノで役人になった。そして音楽は趣味にとどめたまゝ、公務を全うし人望を集めて、1858年、独身のまゝ74才の生涯を閉じた。母親や弟とは数回しか逢わずの、数奇な運命を辿ったのであった。

左：カルル　右：フランツ

それに対し、弟のフランツ・クサヴァー・ウォルフガングは1791年7月26日の生まれである。父親が死んだのは12月5日であるから、その時はまだほんの4ヶ月位である。当然、父親のことは何もわからない。影響がおよぶのはその後である。母親コンスタンツェはよほどこの弟を可愛いと思ったらしく、突然に教育ママへと変身すると、彼を「第2のモ

ーツァルト」にしようと決心し、なんと名前をアマデウスに変えてしまったのである。ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト、2代目の誕生である。そればかりでなく、音楽的な実力も、というわけで、父親と交際のあった音楽家たちに次々と声をかけ、教育を委ねることになる。ドゥシェク、ハイドン、フンメル、サリエリ、ニーメチェク、ノイコム、シュトライヒャー、アルブレヒツベルガー、フォーグラーといった錚々たる人たち。彼らが直接間接にピアノや作曲に関わったわけである。

作曲では11才の時の「ピアノのためのロンド」（母親に献呈）を皮切りに、「ピアノ四重奏曲ト短調」「独唱、合唱、オーケストラのためのカンタータ」（ハイドン73才の誕生日を祝って）などが次々と生まれ、その一方で貴族の子弟たちにピアノや語学（イタリア語、フランス語）を教えるということもやって、独立した音楽家としての生活基盤を徐々に築いた彼。しかし1808年（17才）になると、なぜかウィーンを去ってウクライナ地方のレンベルク（現リヴフ）へ移った。そして47才の1838年まで、ここを中心に作曲・演奏活動を続けたのである。その間、ピアノ協奏曲第1・2番、ヴァイオリン・ソナタ、6つの感傷的なポロネーズなどが生まれ、演奏でもポーランドやプロシャ、デンマーク、スイスへ出かけて演奏することをしたが、やがてウィーンへ戻ると合唱曲を発表したり、父親の曲を演奏したりする生活。1842年に母親コンスタンツェがザルツブルクで没する（79才）と、精神的に疲れたものがやがて胃の不調を訴えるようになり、1844年カルルスバートに転地療養したがその甲斐なく、同年7月29日、弟子バウアーに見守られながら息を引きとった。53才。彼もまた独身であった。

兄に比べれば、音楽家としてそこそこには成功したといってよい彼だが、終始つきまとったのは“天才モーツァルトの子供”というレッテルであった。あれこれと有利な点があることは確かでも、一人前になってからはプレッシャーにもなる。作品もピアノ演奏も、聴衆には支持されたが、専門家からは「父親に比べると・・・」とやられて、遂にはそれを超えられない。レンベルクで長く過ごしたのもそうしたレッテルが厄いしたためで、好意を持たれる割には思うような就職先にありつけなかった2世の悲哀を象徴している、といえるかも知れない

近年、この彼の作品が、僅かながらもCDで聴けるようになった。シュワンのカタログでは8枚。わが国では前島園子氏のピアノによる「ポロネーズ集」が出ている（ピアノ曲と声楽曲を中心に、出版された作品は30曲位あるらしい）ので、興味のある方は、お聴きになってみるとよいだろう。

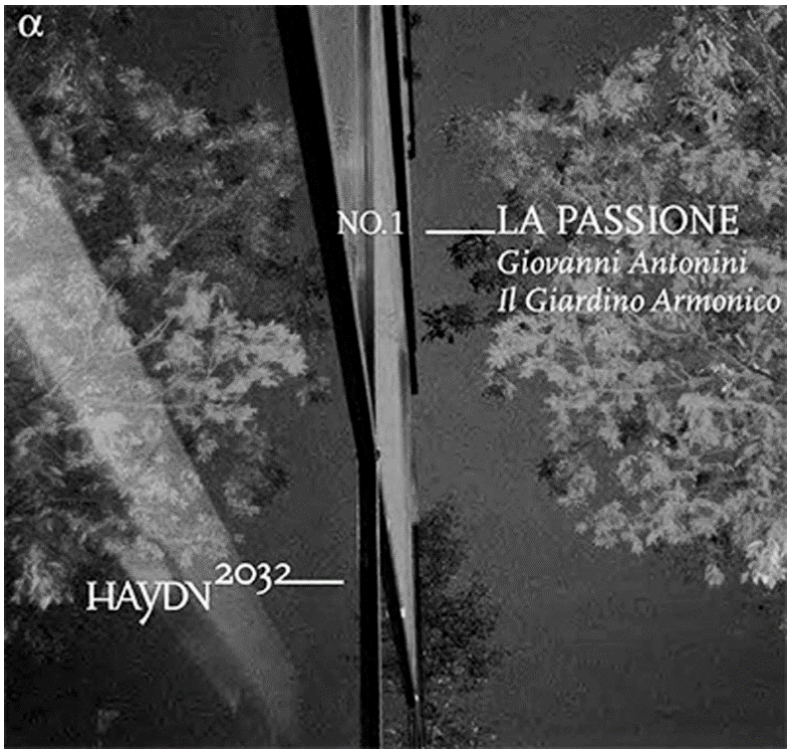
【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【連載】 **音盤奇譚** 板倉 重雄

第 60 回

アントニーニ指揮のハイドン：交響曲録音全集第１弾

イタリアの古楽指揮者、ジョヴァンニ・アントニーニがハイドン生誕 300 年の 2032 年に彼の交響曲全 107 曲の録音完成を目指す壮大なプロジェクトを立ち上げ、その第 1 巻が 2014 年 11 月に発売された。まず時代楽器＆奏法を用いたイル・ジャルディーノ・アルモニコによる文字通り疾風怒濤の演奏が鮮烈だ。ここでは確かな時代考証、高度な演奏技術、吹き上がるような創意が高い次元で結びついている。ハイドンの交響曲 3 曲とグルックの作品を組み合わせ、様式の近似を示した選曲、解説書冒頭 10 ページを写真だけにして、アルバム・コンセプトを表現したセンスも秀逸だ。解説文もたいへん充実していて、詳細な楽曲解説のほか、指揮者アントニーニのエッセイも収録されている。その中の一文が目に留った。



「ハイドンの第 1 交響曲にはじめて出会ったのは、10 歳くらいの頃でした。家に、マックス・ゴバーマンという人が指揮したこの曲のレコードがあったのです。それで、この曲がとりわけ好きになりました。とても精巧に組み上げられていて、小さな宝石といってもよいような美点がたくさんあって…」（白沢達生氏訳）。

そう言えば、アメリカ・オデッセイの LP にゴバーマン指揮によるハイドンの交響曲があり、全集には至っていないもののかなりの数の録音があったことを思いだした。しかし、それらは 60 年代初頭の古いステレオ録音であり、たまに中古屋で目にしても白地にパステルカラーのジャケットも薄汚れたものが多く、誰も振りかえることのない LP となっていた。

ところが、同じ 11 月の下旬になって、ソニーからゴバーマンが録音した 45 曲のハイドンの交響曲を限定盤で一挙に CD リリースするニュースが流れ、たいへん驚かされた。まさに偶然の一致である！　ゴバーマンの音楽的遺伝子は現代のアントニーニに受け継がれ、かつアントニーニ盤の登場がゴバーマン盤の復活を導いた形となったのである。

●ハイドン：交響曲第 39 番、第 49 番《受難》、第 1 番●グルック：無言舞踏劇《ドン・ジュアン、または石像の宴》　　**〈写真：前ページ〉**
アントニーニ指揮イル・ジャルディーノ・アルモニコ
［Alpha　Alpha670］
2013 年 10 月 20～24 日、ベルリン・テルデクス・スタジオでの録音

●ハイドン：交響曲第 1～17、19～24、26、27、32,、34、35、37、40、41、48、49、51、52、55～57、60、65、92、96、98、107、108 番
マックス・ゴバーマン指揮
ウィーン国立歌劇場管弦楽団
［Sony 88843073942（14 枚組）］
2015 年 2 月発売予定**〈写真：左〉**
1960～62 年録音。マックス・ゴバーマン(Max Goberman 1911-1962)はフィラデルフィア出身の指揮者。ニューヨーク・シティ・オペラの音楽監督を務める傍ら、ブロードウェイでも活躍した。1960 年に史上初のハイドン交響曲録音を目指すも、51 歳で急逝し未完成に終わった。

【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て 1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月、「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」（アルファベータ）を上梓。現在タワーレコード株式会社商品本部勤務。

ART
IST
VOICE

ARTWORK BY HANAKO YOSHIDA

人・アート・思考塾（9）

作曲　小西徹郎

人の手を感じる自然の営み

感じる、という言葉は芸術に限らず生活を含め多くの場で使われる。人に過剰な意識がなくとも常に身体の中にあるものだ。便利になり簡便が進み、恐らくだが現代人は「感じる」ことの振り幅は太古に生きた人たちよりは狭いだろう。感じるということを大切にし、パフォーマンスを通じて音楽表現をしているからには、やはり美術鑑賞は私にとって非常に重要な栄養源といえる。普段からの私のテーマ「他分野との交差」「視覚と音の関係」などに直結してくる。音楽は奏でられて音に命が吹き込まれるのと同じく、絵画も筆という楽器が絵の具という音色を出し、カンバスというホールで奏でる、そんな共通する感がある。

先日、若手画家の吉田花子さんの個展“faces”を観に銀座のGallery Qに足を運んだ。彼女の作品たちは写真でみてとれるように抽象絵画である。抽象絵画はどうも理解できない、という方も多いとは思うが、彼女の作品はもちろんだが、活動としてとても興味深いのが「インテリア」とのコラボレーションである。絵画をそのまま部屋に飾るだけでなくクッションカバーになったりステイショナリーになったりと、絵画作品の可能性を大きく拡大している。渋谷西武百貨店

で初めて観た展示では作品だけでなくインテリアとしての提案もされており、その活動が私の音楽表現活動にも通じると感じていた。馴染みが薄いとされている抽象絵画、現代アートを身近にしていくという素敵な試みで芸術と社会の界面を広げていっていると思った。そのことを思い出しながら先日の個展では鑑賞を楽しんだ。

自然が積み重ねてきた時間を人の生きる時間に流し込んでみる。削り取られた時間のかけらを追いかけていくと、幾重にも重なった色彩が、まるで時間の扉のように、すぐそこに、ある。だが、手が届くであろう人の時間を覆い隠そうとしながらも隠しきれない、そんなあどけなさもとても素敵で見逃せない。吉田花子さんの作品には**人の手を感じながらも自然の営み**のように感じる手触りがある。「描く手は感じた気配を切り取る」そう語る吉田さんは「感じる」ことを大切にしている作家である。「感じる」ということが多くの作り手の中に満ちていないと感じる昨今、おおらかな気配と時間のいたずらを感じる吉田花子さんの作品は、多くの"空間"に"空感"していくのだろう。

よく、「この作品のコンセプトは？」といきなり質問してしまう鑑賞者も多い。作品のコンセプトは言葉、解説でしかない。理解しなければならないという一種の強迫観念がそうさせてしまうのだろうか？絵画、美術に限らず、音楽も舞踊ももっと自由に感じるという鑑賞の仕方があってもいいのではないだろうか？また、「理解できない」ことを楽しむことはできないだろうか？「理解できない」ことから思い描く、それぞれの鑑賞者なりに考えてみる、そういう楽しみ方があることを伝えたい。

人の手によって生み出される作品、そこには人としての自己顕示の欲求は必ずある。だが、その欲求の方向を少しずらしてみると作品を作る、表現をしていくときに自然体ということを実感できるだろう。そして作品や表現も自然の手触りを感じることができるものになっていくのではないだろうか？人の意識は集中すればするほど鋭くなっていき、その鋭さは深さを増すと同時に狭さも生まれる。無意識の部分、ニュートラルに感じることができる心の余裕は意識以上の広さがあるだろう。わかりやすく喩えるならば、かわいい子猫は自身のかわいさを知らない。かわいさを意識しているわけではない。かわいさは第三者の中に感じるものだともいえる、ということだ。何気ない仕草に心を惹かれる、そんな表現をしていたいしそんな作品でありたい。また、美術作品から、また舞踊、人の動き、また或いは写真、街歩きから感じる人々の営み、そんなところからいつも音楽と空気を感じていたい。それが作品や表現につながっていく。そのつながる瞬間をいつも感じていたいと願う。

こにし・てつろう　日本音楽舞踊会議理事
タイトルロゴ：前川久美子
（日本出版美術家連盟　賛助会員）
絵画作品及び写真提供：吉田花子

《明日の歌を》— 楽友邂逅点ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第十一回　五感の季節……1997 年秋からの呼び声（2）

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。
十一回目は、「五感の季節」について。随想あるいは自由筆記の感覚で記したい。

■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会議理事）
作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派（「音楽現代」誌）』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価を追究している。

■もう一枚の地図

写真家 小林紀晴（こばやし・きせい）氏の著作「ASIAN JAPANESE（情報センター出版局／1995 年）の中で、地図について触れる所がある。旅をする人同士、普通の地図だけでなくもう一つの地図を心に持っているという。その地図を感じながら旅をするので、その地図を持っているもの同士、国を超えていても偶然再会する事がある。

しかし仮に、誰でも行きそうな有名観光地のみを回っていたとしても、その地理的条件、時間的条件を思えば、遠く離れた国や場所で再会するということはあるだろうか。だが実際、1997 年の私自身のヨーロッパ放浪の無計画一人旅で、現実にそれがあった。ある人たちとユースホステルで別れて数日後、全く別の場所で再会したのだ。互いに移動型の旅人。私は好奇心や感受性のまま動いていた。その時に心に与えられたもう一枚の地図を持って動いた結果、その地図上で道が交差していたとしか思えなかった。

■感受性の成長という事

ここで感受性というものに思いを馳せ、仮説を立てる。我々の感性、特に感受性は、年齢問わず成長するもので、それは、おそらく自分が思っている以上の可塑（かそ）性があるのではないか、と。認知的感受性と情動的感受性・・・特に情動・感動に関する感受性は、別の多くの感動体験で大きく拡げられるのではと、時々思う。丁度子どもが、その手を広げて自分を取り巻く世界全体を把握しようとするように。それは、いつでも、何歳でも。

思うに、我々の感受性は涵養する事が出来る。分野問わず、多くの感動を受け、感動に包まれ、そうして身体に刻まれた感動経験によって。受けた感動の振幅や深み、質や量などを含めたその「触れ幅」こそが、自身の表現の幅や深みとなる。それは必ずしも同業のものである必要は無い。特定分野に特化して生きてそればかりになっていると、幾つもの経験が類型化・パターン化され、その分野からの感動体験が薄まることもあるだろう。その時、「自分の分野だけに留まるのではなく、他

の芸術にも触れなさい」という言葉が真の重みを持って来る。その時こそ分け隔てなく心の枠を拡げなさい、感受性そのものを拡げ、深めなさい、と。

■技術の先に……「全人的行為」としての芸術

さらに言えば、感動だけで芸術は出来ている訳ではなく、それを表現する為の技術も必要である。art の語源は「技術」を意味するという。「Ars longa, vita brevis」芸術は長く、人生は短い。有名なラテン語だ。辞書によると大意は、「技術を習得するのには時間がかかるから、時間を無駄にしないで励め」とある。

多くの感動を表現出来る人がいる。勿論、それは多くの場合、感動を表現し伝える技術を学び、研鑽を積み、高めた結果であるだろう。時に技術そのものを深める事、技術の為の技術も目的になろう。名手の技芸は、それだけで感銘を受ける事がある。

しかし、技術に留まらずあるレベルを超えた人たちのその礎（いしずえ）にあるのは、その人自身もやはり多くの感動をする人間ではないだろうかということである。多くの感動に裏打ちされた技術というものが、感動を創り、感動を呼ぶ。では技術を使い、何を表現するのか。やはりまず、心から心へメッセージを伝える事が一義ではないか。自身の感受性から生まれた感動の共感、響鳴、共振である。

芸術と云う名の感動の表現は、実は同時に、自分を探し、創る技術でもある。自分の好きなものに没頭している姿ほど、説得力のあるものは無い。創造の根源にある「自分は何に感動する人間なのか」「自分が求める表現は何か」「自分の信奉する芸術は何か」……芸術は感動とともにそれが伝わる行為とも言える。さらに究極目的である、「（自分の）人生、生きるに足る事は何か」という深遠な問いかけ、それら全てが芸術を通して伝えるものに反映される。そう、芸術は「全人的行為」であると私は信じる。

■感受性の旅へ

自身が作曲家・音楽人になって一番驚いているのは、特定の方々との、思わぬ場所での思わぬ再会があったりする事である。「世間は狭い」「業界は狭い」と、思わずつぶやいてしまう面白さである。コンサートホールや仕事の現場では不特定多数の人との出会いが多いのは確かだが、偶然何度も会っているうちにいつのまにか「時折会う人」から「大体会う人」になり、その内、「いつもいる人」に、ついには、「いてくれると嬉しい人」となる場合も多い。みんな、もう一枚の地図に添って生きているかのように、現場で出会い、別れ、そして再会する。

放浪の旅で得た、「世界には『もう一枚の地図』というものがある」というこの感覚を、私は今でも信じている。その地図はおそらく、誰でも持てるし、手にする機会がある。それは、自分の好きなもの、好奇心や感受性に正直に生きている人の手に、いつの間にか持たされるものじゃないかと思う。

鉄道の一人旅に限らず、旅は人を思索に誘（いざな）う。そして旅の思索は、現実の生活にも作用する。現実もまた、感受性の旅とも言える。

※ 次回は「五感の季節……1997 年秋からの呼び声（３）」

「旅をする理由」について

コンサート・リポート

深澤亮子、恵藤久美子，中村静香、安田謙一郎
～室内楽の夕べ～深沢亮子と室内楽の仲間達～

例年，師走に催される日本音楽舞踊会議のメインコンサートでもある、深沢亮子を中心とした室内楽によるコンサートが、新たに会員として加わった中村静香（vn、vla）を加え、今回も1 2 月5 日神楽坂の音楽の友ホールで開催された。
このコンサートでは，従来あった深澤の独奏は無かったが，アンサンブルの中で生き生きとした彼女の演奏をこの一夜を通して聴けたのはこの日の聴衆にとっても大きな収穫であったに違いない。それと，各席はほぼ満席と云って良い状態だった事もここに記しておく。

前半は，最初が，当会代表でもある助川敏弥作曲の「ヴァイオリン，チェロ,ピアノのためのトリオ」。曲は，助川が0 ‘１１ ～0 ’１２ にかけて書き上げたもので今回が初演となった。この曲で、助川は淡色の中にある陰影や濃淡でもって、そして自由だが緩やかな形式感のもと，淡水画の世界へと、我々を誘う。無調的な部分と調性的部分が曲中現れるが，決して対立を強調する訳でもなく，押し付けがましい所も無く、作者の素直な気分がそのまま描かれている所等，好感を持てたと云って良い。演奏の方も細い線を大切に辿り乍らのデリケートさを保ったアンサンブルとして良く纏まっていた様に思う。但し，次の一点，このトリオ曲に於けるピアノの役割について触れると、ピアノは1 本の線として単音で使われる事が多かったが，果たして，これがピアノでなくてはならない必然性があったのかどうかは、他に異論もあるのではないかと推察出来るのだがどうか。

次はシューベルトの有名なイ短調の「アルペジオーネソナタ」。普通、良くチェロで演奏される曲だが今回のソロ・パートは中村のヴィオラによった。中村は本来、優れたヴァイオリン奏者であるのだが，ヴィオラ奏者としても同等の演奏が出来る日本では稀有な2 刀流の奏者だと云う事をここに付け加えて置こう。第１楽章では pp で始まる憂いのある印象的なテーマを深沢のピアノが奏で，それを中村のヴィオラが再び引き継いで発展して行く。深沢のピアノは憂いの中にも強さを秘めており存在感を示していたし，中村のヴィオラは揺るぎない音程に裏付けられており，情緒に流され過ぎない力強い表現は深沢とのデユオに豊かな広がりをもたらしていた。第2 楽章は歌曲的な、間奏曲的性格を持った曲で，アタッカで第３楽章に（終楽章）進む。ここでは深沢のピアノはたっぷりとした，しかし正確なリズムでソロパートを良く支えていた。連続する第3 楽章は優しさと軽やかさを持ったロンド。ヴィオラの軽快な弓捌きとそれを支える深沢の揺るぎないリズム感は押し付けがましい所がまるで無く，自然な音楽の流れを我々に与えてくれた。

休憩後はモーツァルトのピアノ四重奏曲第1 番ト短調 k.478
第 1 楽章はソナタ形式で冒頭の勇ましい全員のユニゾンで第1 テーマが始まるが，これはピアノの対句を伴っている。この形が属和音上でもう一度現れ，更にこの対話形式が細分化し発展して行き細かい動きを伴う変ロ長調の第2 テーマへと進むと云った経路を辿る。ここでは深沢はメリハリの利いた左手，細やかなパッセージでの表情付け等を通してモーツァルト音楽の楽しさ，そしてモーツァルトへの造詣の深さを我々に示してくれた。弦の三人は、恵藤の繊細さ，中村の力強さ、安田のパッショネイトなチェロと云った豊かな個性により深沢のピアノと相まって創造的な，厚みのあるアンサンブルの世界を作り上げていたと言えよう。第2 楽章はのどかで心優しい曲。形式は展開部を持たないソナタと言えようか。4 人の演奏からはゆったりとした，午後の一時のようなリラックスした空気が感じられた、終楽章は軽快さの中に幾分の憂いも感じられるロンドで、モーツァルト特有の」半音階的な8 分音符のフィギアーがこの曲の雰囲気を形作っている。又、曲途中に K.V.485 ニ長調のロンド（ピアノ曲）のテーマが4 小節だけ現れるのも注目すべき事。そして、ここでも4 人の息の合ったアンサンブルは見事で、クライマックスを経て曲は終了した。万雷の拍手に応え，アンコールには第2 楽章が演奏された。特に、今回の特徴は、弦が一つ加わった事により厚味のある響きを持った、個性的なコラボレーションで、このカルテットを聴けた事であろう。これは大きな収穫であった。

後記
深沢亮子を中心としたこのコンサートは日本音楽舞踊会議のメインコンサートして長く、８０ 年代から毎年約３０ 年間に渡り続いて来た。第1 回は深沢のピアノ独奏、その後は毎回、音楽の友ホールで吉江忠男（バリトン）と深沢とで約１５ 回程に渡って続き，その後、ヴァイオリンの劉薇とのデュオ、同じく恵藤久美子とのデュオを経て次からチェロの安田謙一郎が加わりトリオとなり、ピアノと室内楽の夕べとして同じ音楽の友ホールでの師走の公演が恒例となって現在に至っている。その間、会員外からのゲスト、ヴィオラの江戸純子、クラリネットの藤井洋子と云ったそうそうたるメンバーが加わった公演もあった。筆者も２００２ 年から現在迄の１２ 年間この公演の企画、実行委員をして来たのだが来年度から任を終え、優秀な後進でもあり深沢門下の才能豊かなピアニストでもある栗栖麻衣子にこの席を引き継いでもらう事となった。宜しくお願いする。又、公演の継続と更なる発展を希望してこの文を終える事にする。

公演局長　北條直彦（本公演実行委員）記　０‘１４　１２　２３
（文中、敬称略）

コンサート・レポート

EL オーケストラによるコンチェルトとアリアの夕べ

（出演者、出品者につきましては敬称略とさせていただきます。）

コンサートはハイドンの調べのように軽快な佐藤光政の司会によって始まった。そして私の筆もさえずるかのように軽やかに走っている。

エレクトーンと生楽器、声によるアンサンブルのコンサート。私自身も実際にジャンルは異なるが生楽器と電子楽器の演奏の仕事をしていることから電子楽器の音と生楽器の音の空間作りにはとても興味深く、どのような「音場」になるのか？を楽しみにしてコンサートに足を運んだ。通常、ホールの響き、残響がある程度ないと電子音と生楽器はうまくまとまらないものだ。電子楽器のリバーブ（電気的に作られた残響）、また音そのもの（原音）はホールの響きから生まれたものではなく電気的に作られたものである。そこに「現実」としてのホールの響き、生楽器の音源（音の出所）とはイコールにすることはとても難しい。例えば、自身の現場でもいえることだが Tutti のフォルテならばある程度まとまりがつくが、弱奏部分においては当然音圧が下がるため生楽器と電子楽器の音は分離してしまう。私の現場もその部分でせめぎあいが常にある。

このたびのコンサートの編成はヤマハの STAGEA（ELS-02C）というエレクトーン３台、そこにピアノや声楽、ヴァイオリン、また筝など多彩な楽器が代わるがわる音楽を奏でていく。また会場のヤマハ エレクトーンシティ渋谷３階のメインスタジオは元々残響がデッド（響きがなく、劇場や映画館のような作り）のためヤマハの音場支援システム「夢響」（空間の音を集音し、電気的に響きを生み出すシステム）が８本、スタジオを囲むように配置されている。エレクトーンの音源部分はサンプリング（実際のオーケストラのサウンドを“録音”して鍵盤に割り当てる）によるもので大ホールでの１００名程度のオーケストラの音がする。実際に会場での生楽器の響きとエレクトーンの音の響きとの異なりがある中、どのようにしてその分離している音空間を解消していくのか？その様子をゲネプロから拝見させていただいた。

まず、とても素晴らしいと思ったのは指揮者、寺島康朗のきめ細やかな音楽作りである。とても繊細で電子楽器、オーケストラ、生楽器という垣根を越えて「音楽を創り上げる」という妥協のない解釈と指示に私自身も頭が下がる思いであった。そして、その指示に応えるエレクトーン奏者の西山淑子、千葉祐佳、鈴木栄奈、佐々木彩香の表現力の高さにとても驚かされた。エレクトーンの素晴らしさはもちろんあるのだが、その素晴らしさを活かせる演奏者の表現力なくして音楽は成り立たない。エレクトーンは電子楽器だが DTM（デスクトップミュージック）のように音符をパソコンに打ち込み、機械に演奏させるのではなく人が演奏し、人の持つ表現力を駆使して活き活きとした音楽を奏で、そしてそこに収まらずたくさんの楽器、人、とのアンサンブルをすることができる非常に優れた楽器であると共に多くの可能性

を持っているのだ。指揮者からの細やかな指示、そして音のバランスへの配慮。ゲネプロは終了し、開場となった。たくさんの観客が訪れ、会場はあっという間に観客の「音楽を楽しみにしているオーラ」で満たされた。

開演。軽快で爽やかな佐藤光政の司会でコンサートは始まった。ハイドン、モーツァルト、グリーグなど耳に馴染みのある音楽、またサミュエル・バーバーの海のような抒情、ブラームスの重厚、そして作曲家 高橋 通による箏のための作品、「コンチェルティーノ　第１番」は淡い色彩の中に光る糸、そんな映像が瞼をくすぐる音楽。とても楽しめて観客と演奏者との一体感が感じられるプログラムだ。

プログラム第一部の最初はハイドン　ピアノ協奏曲　Hob. XⅧ:11 第１・３楽章。ピアノは寒河江真弓。プログラムのトップを飾るにふさわしい作品である。軽快でかわいらしく、はじけるポップコーンをこぼさないように追いかけているような素敵な演奏、そしてその演奏の足元を風のように、季節の移ろいのように支えるエレクトーンの演奏。そして寒河江のドレスは太陽のように赤かった。

プログラムの２つ目はモーツァルトのコンサート・アリア　作品５０５　“どうしてあなたが忘れられよう？”。ソプラノは笠原たか、ピアノは広瀬美紀子。両名とも月夜の森を思わせる深いグリーンのシックな装いのドレスで登場。そのシックなドレスの中に秘められた恋心と焦燥感にも似た感情の速度と起伏。その歌声に呼応するピアノは慰めるように、またあるときは煽るように歌声に寄り添っていた。

プログラム３つ目はグリーグのピアノ協奏曲　イ短調　作品１６　第１楽章。ピアノは戸引小夜子。この作品も多くの人が耳にしたことがあるだろう。あまりにも有名な作品である。ピアノとオーケストラの役割がとても明確にわかる作品でもある。冒頭の力強いピアノから次に浮かび上がるエレクトーンによるオーケストラ。ピアノとエレクトーンの音楽的感情のやり取りがとても印象的だった。戸引のドレスは空に浮かぶ流氷のようにうっすらと青かった。

第一部の最後はサミュエル･バーバーのヴァイオリン協奏曲　作品１４ 第１楽章。ヴァイオリンは木下晶人。海原に咲く一輪の花を思わせる木下のヴァイオリンの音色は、繊細で波打ちのたびに花びらを潤し艶やかである。オーケストラの海原を波乗る演奏はとても印象的で、ときに海面すれすれに飛ぶカモメのようでもある。この作品は聴いているととてもシンプルで、エレクトーンオーケストラには音色のバラエティさではなく、ヴァイオリンと共に歌い上げる表現力が重要だと感じたが、エレクトーン奏者の高い表現力がとてもよく活きていると感じた。

プログラム第２部の最初は高橋 通 作曲による「コンチェルティーノ 第１番」。箏のための作品である。箏は高橋澄子。エレクトーンによる絹糸のような笙の音で始まり､箏の音が入ったと同時に空気はがらりと変わった｡豊かに乾いた音色は瑞々しいエレクトーンオーケストラに溶け込み、掛け合いは音色の対比が短歌と返歌の

ように楽しげであった。また高橋 通作品の特徴でもあるクロマティックを交えた旋律が私はとても好きで「高橋節」が聴けたことがうれしかった。高橋澄子の衣装は和服素材であつらえた洋服でとても新鮮であった。

第２部の２つ目はモーツァルト　歌劇「魔笛」より「ああ、怖れおののかなくてもよいのです、わが子よ」「復讐の炎は地獄のように我が心に燃え」。ソプラノは村上貴子。ドレスは夜の闇を愛でるパープル系。足元に向うラインは根のようでもあり花びらのようでもあった。この作品もよく耳にする馴染みある作品だ。聴く者の額がゆさぶられる歌声はまさに音を身体で感じ楽しませてくれる。観客とキャッチボールをするように歌声と音楽は会場を満たしていた。

最後のプログラムはブラームス　ピアノ協奏曲第２番　op.83 第１楽章。ピアノは浅井隆宏。ピアノ協奏曲と名づけられているが交響曲のようにも感じる重厚さがある。とても聴き応えのある音楽でエレクトーンオーケストラ、ピアノの浅井、共に力演であり熱演であった。

とても親しみやすいプログラムにとても親しみを感じる佐藤光政の軽快な司会は会場の空気の一体感を演出していた。そしてエレクトーンと生楽器とのアンサンブル、ここに私は音楽としての可能性をとても大きく感じた。コンサートの楽しみ方は観客それぞれであろう。音楽に集中するのもよし、衣装や空気も視野に入れて楽しむのもよし。観客それぞれの「私のコンサート」を楽しんだ軌跡が会場をあとにする観客の表情に移り香のように残っていた。

（小西徹郎）

コンサートレポート

第20回”詩と音楽を歌い、奏でる”トロッタの会

作曲　小西 徹郎

（敬称略とさせていただきます）

2007年に始まったトロッタの会は今回で20回を迎えた。詩人で詩唱家の木部 与巴仁が中心として続いてきたこのコンサートは音楽だけでなく詩という要素や一部に視覚要素も加わりとても見応えのあるコンサートである。出品される作品はほぼ新作の初演で、木部の詩作品を軸に作曲家たちが作品を作り上げていく。詩の世界は木部による詩唱と声楽による歌へと言霊は意識を持ちながら変容し、音楽と言葉、言霊の世界を常に行き来していくのだ。

詩唱とはいったい何なのか？詩の朗読とはどう異なるのか？木部にはこの部分において確固たる信念がある。朗読ではなく詩を歌う、歌い上げることと朗読は感情の手触りが異なる。音楽として、感情の表現の幅、可能性を拡大している。これが木部与巴仁が大切にしている詩唱という表現なのだ。

学生の街、早稲田。ここに早稲田奉仕園がある。その中にあるリバティホールというとてもシンプルなホールで２０１４年１１月２９日の土曜日、トロッタの会は第20回を迎えた。雨が降り、足元が心配されたが午後から空は晴れ渡り良き日であった。今回のレポートは日本音楽舞踊会議の理事、橘川 琢、高橋 通の作品、演奏の様子をお伝えしたいと思う。

“新感覚抒情派” 橘川 琢の世界

橘川 琢の作品「詩曲『花舞』op.59(2014/初演)」は木部与巴仁の詩作品「花舞」をもとに書かれた。人は生きながらたくさんの寄り道をし、その寄り道の先にある何かを糧に生きている。花の生き様を人になぞらえてみる。すると寄り道をすることもなく生きて死することだけに情念を燃やし続けていることがわかる。花の生き様は人にとっては本能を満たすための時間の積み上がり、なのかもしれない。それは恋の駆け引きにも表れているように。

緩やかなるもドラマティックで力強い「橘川旋律」は導入から既に“花舞”の物語を示唆しながら本能の根幹、感情の根幹を歌い上げていた。旋律の音の運び、一音一音に深い根を感じずにはいられない。堅く、ブレのない深い根に、打てば響く音楽は風と花による死するまで続く”想いの駆け引き”のようにも思えてくる。その駆け引きが乱舞する花となるのだ。橘川の音楽は風に踊らされる花、風と花の駆け引きに一歩下がり寄り添いながら見つめ、死するまでその音楽を昇華し続けていた。

トロッタの会の橘川作品では、花の上野雄次による「花いけ」が共にある。上野の花いけは明かりと影による花の生き様と舞の表現。暗がりの会場に回り続ける花の陰影は乱舞のようであった。人は死を意識するともがく。そしてそのときの直前には苦しみから逃れようと感情を超えた感情が肉体を支配する。その焦燥感の速度は生きることから解放されるまで上がり続けるのだ。上野の花いけのクライマックスでは見事なまでに理性は破壊され、音楽は生と死の炎に煮えたぎる油を注いだ。もしも、死へのクライマックスが光と喩えるならば、光への導きのメロディや音楽の手触りは影なのではないか？とも思えるほど激情に満ちていた。そんな音楽、そんな花の舞であった。常に「人」と「花」というそれぞれの像がジャストロウの「あひるうさぎの図」のように激しく高速で行き来し同化していた。

木部の詩唱は音楽の感情に寄り添いながら音楽のダイナミクスレンジを最大限に拡大していた。戸塚ふみ代のヴァイオリンは「花の女」を見事に演じきり、伊藤美香のヴィオラは花に想いを告げる「風の男」を演じきり、森川あづさのピアノは複雑に、狂おしく絡む感情の糸を燃やしていた。”新感覚抒情派” 橘川 琢の世界には常に激情と感情のやり取りが音楽の細部にまでしみこんでいる。そして、その音楽は聴く者の心にしみこんで残り続けるのだ。

“対峙”と”融合”の作曲家　高橋 通の世界

高橋 通の作品「命のある風景（2014/初演）」は木部の詩作品「命のある風景」をもとに書かれたバリトン、ヴァイオリン、ギター、打楽器による作品だ。会場でプログラムを見て私は、高橋に作曲をオファーするときの話にとても興味を持った。「絵に静物画があるなら、音楽にも静物の曲があってもいい」（プログラムより一部抜粋・引用）ここだ。私は視覚と音の関係にとても興味があり現場でも実践していることからとても楽しみな作品であった。また、高橋 通自身も舞踊と音楽という視覚と音の関係、その世界について非常に造詣が深い作曲家である。

詩の持つ世界はとてもシュールである。元々、現実を描いたものはそんなに楽しいものではない。言葉の世界の中のいびつさや矛盾（良い意味で）は魔法のように、思ったように描くことができる。その自由さが楽しい。「描いていくことができる」このキーワードからオファーのときの話になったのだろうか。

音楽はステージ全体がキャンバスのようにも感じた。ステージというキャンバスの中でそれぞれの楽器、演奏者は「視覚的場所」を表していたようにも感じる。音の出所、位置がはっきり明確にわかる音楽の作り方、混ざらない音、フレーズ、ここにこの高橋作品の面白さを発見できた。混ざらない、個々がステージという空間の中に存在していることが視覚的な音楽ということなのだろうと感じた。

萩野谷英成のギターは一音一音が非常に美しく、その存在感が音楽全体に波及していく。戸塚ふみ代のヴァイオリンはキャッチした音の欠片を微細な羽毛の上で転がしているように感じ、パーカッションは空気を晴らしていくような、空間としては重要な役目を持ち、バリトン、根岸一郎の歌声はこの作品が持つシュールさと詩の世界を“怪しく”歌い上げていた。今までの高橋作品にはなかった音楽の作り方だったのがとても新鮮であった。そして高橋作品の大きな特徴であるクロマティックを取り入れた旋律が非常に良く活きた音楽であった。

作り”混む”世界ではなく、しっかりと、明確に筆に音楽をしみこませ「置いていく」という音楽作りはとても素晴らしいことであるし、旋律、音楽に「個」を感じさせる作曲家でなければできない音楽の作り方であり音楽であろう。思考は常に”対峙”（向き合い）の姿勢であり、音楽には壁を作らず常に融合させていく。高橋 通の世界は常に何かを思い起こさせる力に溢れているのだ。

今回、久々に鑑賞し、多くの観客に恵まれた第２０回”詩と音楽を歌い、奏でる”トロッタの会 コンサート。全９作品は観客の心にしみこんだことであろう。日常生活、たまにでかけるコンサート、そのコンサートもこのトロッタの会のように観客それぞれの人生の中に言葉、音楽、空気が息づいていく、そんな豊かな時間であってほしいと願う。素晴らしいコンサートであった。

２０１４年１２月８日　（こにし・てつろう）

コンサートレポート

現代作曲家グループ「蒼」　《金管五重奏による５つの視点》

作曲　小西徹郎

今年で３２回を数える現代作曲家グループ「蒼」の新作書き下ろし演奏会に足を運んだ。グループ「蒼」は楽器編成を特定してそれぞれ作曲家が作品を書いて発表、という形で作品展を積み重ねてきており、作曲家 名取吾朗の理念である『エコールや師弟関係に一切とらわれず、個々が自らの芸術性に根ざした作品を追求する』のもとに１９８２年７月に創設された。（プログラムより抜粋、引用）。私も普段トランペットを吹き、また若い頃吹奏楽や金管五重奏をしていたことや、今現在吹奏楽の講師(トレーナー)をしていることから、懐かしさとともに新鮮な気持ちで演奏会を楽しんだ。

総じて言えば、金管五重奏（トランペット２名、ホルン、トロンボーン、チューバ)という編成に５人の作曲家の５つの視点――　全体的にオーソドックスな張りのある金管の響きの中に作曲家の音楽世界を染み込ませていく作品と、音楽や音楽構造そのものをダイレクトに、厳格に求めていく求道的作品にわかれる５つの視点であった。技術的にも音楽的にも非常に難易度の高い作品たちであったが、オーソドックスな響きの作品には作曲家の「個」が豊かに映し出され、厳格に求めていく作品には金管五重奏の新たな響きの地平を感じた。

小菅泰雄「シンメトリア」―金管五重奏のための―　楽器の配置をきっかけにシンメトリックな音のキャッチボールで始まり、前に述べたようにブラスの響きに重点を置く以上に「音楽世界や音楽構造そのもの」を演奏者、楽器にダイレクトに求めており、非常に高い緊張感の中、求める音楽の核が雄弁に語られていた作品であった。ロングトーンとリップスラー（完全４度）という管楽器の基本技術が音楽の始まりと終わりのきっかけになっていることはとても興味深かった。厳格に求められた音楽の核に、人の感情世界とは異なる視点を見つけることができ、それもまたとても新鮮で印象的であった。

佐々木 清裕　「UGC10214」　この作品タイトルは地球から４億光年も離れた銀河の名前で２８万光年もの長さの尾を持つ銀河とのこと。作品を聴いているとホルンとトロンボーンとテューバによるゆっくりとした変化のあるドローン（ロングトーン）はまさに長い尾を持つ銀河「UGC10214」を思わせ、２本のトランペットによるフレーズは星屑のようでもあり、また高速に過ぎ去る惑星のようでもあった。時間の流れと瞼に浮かぶ映像がとてもよく合致しており、高い緊張感の中でありながら聴く者をトリップさせる魅力のある音楽であった。プログラム１番目の小菅作品と同じく、厳格に音楽世界を求めていく作品であり、金管五重奏のブラスの響きの新たな地平を垣間見ることができる作品であった。

清道洋一　「セレナード～serenade～」 舞台音楽を長年作曲してきた清道作品らしさが満載の作品で、賑やかな街の光景、人の営みが見えてくるような音楽であった。５つの楽章からなるこの作品はどの楽章にも劇のようなストーリーに満ち溢れており、聴いていてほぐされていくように感じた。しっかりと充実した伴奏として

の役割と旋律の明確さがアレンジを通じて伝わってきて、とても良い意味での「キャッチーさ」が５つの楽章の中に現れており、そのことが劇のストーリーとしての印象を覚えたのかもしれない。２楽章の“Tango Japones”（日本的タンゴ）では津久井 利忠によるワウワウミュートを装着したトランペットの演奏がとても印象的であった。また３楽章ではトランペット２本によるＥ音のロングトーンのキャッチボールがとても印象的で演劇の舞台、舞台の上で演じる役者の姿と表情が浮かんできた。ブラスの響き、いや、「清道的ブラスの響き」はまさに娯楽的で祝い事の席での人々の顔、表情まで表現していたと感じた。

橘川 琢　組曲「都市の肖像」第７集　金管五重奏曲「Metropolitan silhouettes」op.60　私は吹奏楽や金管アンサンブルを若い頃よく演奏していたので多くの作品に触れてきた。往年の名曲が持つ金管五重奏の風格、品格と力強さと豊かさを橘川作品からひしひしと感じた。ブリティッシュブラスの響きを感じさせる素晴らしい音楽世界であった。第一曲の fanfare の夜明け、第二曲の Metropolitan silhouettes の日中、第三曲の Bridal bouquet では音楽による一日が音楽による人生へと移り、第四曲の Finale「夕暮れの詩（し）」では一日の終わりのようであり、また人生の区切りのようにも感じる。多くの人、命が行き交う都市空間、そこに留めておきたい記憶の欠片がやさしく微笑んでいる――　そんな眼差しを、豊かなブラスの張りのある、とても格調高い響きの中に感じる組曲であった。

橋本正昭「金管五重奏のためのカプリッチョ」　たくさんの音楽が凝縮されていて、それらが代わるがわる現れては去り、また現れる作品であった。作曲家本人が指揮を執ったことにより音楽、響きの一体感を大いに感じた。音の響きとして、作曲家自らも解説に記しているが、音楽素材における３度音程の拘りがあることにより、多彩に移り変わる音楽でありながら一本筋が通った響き、統一感があり、非常に聴き応えのある作品であった。また、凝縮された音楽が代わるがわる打ち出されていく瞬間の連続に「耳が目を見張る」「空気が四方八方から速度を上げて通り抜けていく」ような感触があり、そのこともとても印象深かった。

最後に、同じく金管楽器を演奏する者としてこの度のコンサートの演奏家たちには賛辞の拍手を贈りたい。津久井 利忠のトランペットは繊細で時には女性的美しさもあり、しっかりとした芯がありながらまろやかで力強いサウンドであった。狩野藍美のトランペットは力強く響き、大地を支えるかのような男性的美しさを感じた。堀 実苗のホルンは繊細でありながら五重奏のサウンドに融和すると良き増幅と美しさを見せ、アンサンブルの核を担っていた。土倉 夏織のトロンボーンは高音から低音までとても均質であり、整った、やわらかな音の質感は聴いていて心地よくほっとするサウンドだった。岩澤佳祐のテューバは太く、まろやかでありながら力強い芯があり、芯そのものも太く美しいサウンドであると同時に演奏そのものにインテリジェンスを感じた。そして、この金管五重奏団「Ottone Splende（輝く金管）」の音楽は、繊細で音楽的緻密さと思考の成熟を求められる演奏を見事にやり遂げた素晴らしい演奏であった。2014 年 12 月 9 日・すみだトリフォニーホール小ホール

（こにし・てつろう／日本音楽舞踊会議 理事）

音楽時評　ショパンの心臓

ショパンは1848年のフランス革命の翌年、1949年にパリで病死している。しかし、心臓は彼の遺言により、祖国ポーランドに返された。本当は生きたまま祖国に帰りたかったのだろうが、「心臓だけでも」というショパンの願いに切ないものを感ずる。ワルシャワに返されたショパンの心臓は、いまはワルシャワの聖十字架教会の柱に安置されているそうである。１２月９日の朝日新聞に、調査研究のため、安置されたいた心臓を取り出したという記事が掲載されていた。それは4月14日に極秘のもとで行われたらしい。心臓はクリスタル製の壺の中に収められていたが、壺の中にはさらに二重構造で作られた木箱が入っており、心臓はその中に格納されていたそうである。調査の第一目的は「保存状態の確認」ということだが、極秘に行ったのは、調査を公開すれば、大騒ぎになり、今後、安全に保存することが難しくなると判断したからではなかろうか。心臓の保存状態は良好だったそうである。ショパンの死因については結核説が有力だが、そのほかにもさまざまな説があり、音楽愛好家にとっては興味がつきないが、取り出した心臓は写真に撮ったものの、一般には公開されず、また、ショパンの心臓であることを伏せ、複数の専門医に鑑定してもらうそうである。

その後、心臓は、再び教会の柱に安置され、次に調査のため取り出すのは50年後の2064年とのことである。死因については、いまのところやはり結核説が有力とのことだが、鑑定によって，他の死因が浮上するかもしれない。ショパンは祖国で静かに眠りたかったのだろうが、興味本位の野次馬がワイワイ騒ぐので大いに迷惑しているかもしれない。しかしショパンがそこまで考えていたかは解らないが、心臓を残してくれたことは、医学界のみならず、多くの研究者にとって、貴重な贈り物となったのではなかろうか。

時評　政治家の勇気とは

政治の素人にはまったく予期できぬ時期に解散総選挙が行われ、予想通り与党が大勝した。勝つための選挙、大義なき選挙などといわれているが、単に勝つことが目的なら、志の低い、政治屋のやることである。しかし、勇気ある改革を実行するための手段として勝つ選挙をやったとすれば、本物の政治家である。

大分前のことだったと思うが、当時与党だったドイツの社会民主党は、財政危機を乗り越えるため、革新系政党としてはタブーと思われる、年金支給年齢の切り上げを実行する。当然のことながら、支持者は怒り、選挙で大敗する。しかし、その政策が功を奏して、その後のドイツの国家財政は安定し、ヨーロッパの中でも、最も経済的に安定した豊かな国としての地位を維持している。

大衆の喝采を受ける政治が必ずしもよい政治とは限らない。時には、その時点では国民が嫌がる政治を行い、支持を失い選挙に大敗しても、後々プラスになる政策を実行する勇気が政治家には求められる。　（ふくろう）

追悼　村方千之さんの訃報と思い出　　作曲：助川　敏弥

村方さんについては思い出すことが余りに多い。最初は、芸大一年生の時のこと。作曲科の一年であった私たちは、夏休みに日本アルプス登山を計画した。顔ぶれは、発起人の篠原真、山本直純、それに私、これが男性。女性が、岡本正美、その他二名。この時のリーダーが村方さんであった。村方さんは当時二期上の楽理科の先輩であった。岡本正美さんは、後日、山直純夫人になった。村方さんは自由学院の出身で直純君の先輩にあたり、彼の依頼でリーダーを引き受けてもらった。この珍道中については機会があれば別に書く。その後はしばらく付き合いがなく 30 年くらい経て再会した。晩年は指揮者として活躍、ブラジル音楽を専門とし、日本ヴィラ・ロボス協会会長、ブラジル政府から勲章を授与された。おしゃれでダンディな人であった。一家言を持ち、お人よしでありながら強情だった。敬愛する先輩である。いつまでも心の中に生きる人である。

村方千之（むらかた・ちゆき＝指揮者／本会アドバイザー）
12 月１４日、心不全で死去、８９歳。エイトル・ビラロボスの作品などブラジル音楽の紹介に尽力し、同国からリオ・ブランコ勲章を贈られた。

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★

追悼　保育の母　丸山亜季さん逝く　　作曲：高橋　雅光

丸山亜季さん（本会：作曲会員）が 11 月 16 日心臓疾患により他界された。９１歳であった。
丸山亜季さんは、「音楽教育の会」に所属していて、‘６１年当時、勤労者音楽鑑賞団体「労音」の呼び掛けにより、多くの音楽家・舞踊家が結集され、民主主義について白熱した議論が交わされた、音楽運動懇談会の時に、「音楽教育の会」から参加されて、そのまま’６２年に本会が設立されたときに会員なった方である。
亜季さんの専門は保育音楽で、保育士になる人に群馬の保母学校で、幼児のための音楽を幼児の年代別に、教材選びから指導方法までを、独自の見解による方法で指導していた。
特に歌やリズムについて、子供（幼児）の感覚と知的な発育と共に、子供が共感し達成感を覚えるような指導方法を行っていた。
具体的にいうと、子供たちは遊びながら、体を動かしながら、子供たちが要求する歌を中心に歌い、遊びの中で感受性や知性、心身の成長を育むという方法である。

保育園という集団の中で、一人ひとりの個性の大切さを、上記の保育の積み重ねの中で育てるということを実践していた。

亜季さんは、他界される１週間前迄、保育士になるという人たちを元気に指導していたという。ご冥福をお祈り申し上げます。

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★

訃報　遠山一行さん（音楽評論家）逝去

音楽評論家で文化功労者の遠山一行（とおやま・かずゆき）さんが 12 月 10 日脳梗塞のため、東京都内の自宅で逝去した。享年 92 歳だった。

遠山さんは 1922 年東京に生まれ、東京大学で美学を専攻。24 歳の時、音楽評論家の野村光一さんの推薦で毎日新聞の音楽評論を手がけるようになった。

「演奏家ではなく聴衆の視点に立った評論」を唱えていた。1967 年には芸術総合誌「季刊芸術」を文芸評論家の江藤淳さん、美術評論家の高階秀爾さんとともに創刊、ジャンルの枠を超えた言論活動を目指した。また、明治以降の日本の音楽資料を収集保存する日本近代音楽館設立の際は中心的役割を担ったが、当館は 2010 年に閉館するまで私費を投じて守り続けた。東京文化会館長、東京芸術劇場館長、桐朋学園大学長などの要職を歴任している。２年前に没した吉田秀和氏とともに、我が国の音楽・文化評論の世界における巨星といえる存在だった

氏とは直接面識はなかったが、たまたまあるオーケストラの演奏会の開演に遅刻してしまったとき、同様に遅刻した氏と顔を合せた。たしか、「パルジファル」前奏曲が演奏されていたが、ドアの外から耳を澄ますように聴き入り、傍らの友人に「ここはトリスタンのカデンツ」だなどささやいていた。音楽が本当にお好きなのだな、と感じた。ご冥福をお祈りする。

（本誌編集部　文責：編集長）

読者の皆様へ　『音楽の世界』刊行形態変更のお知らせ

『音楽の世界』は 1962 年に創刊して以来、50 余年の間、月刊誌として刊行続けてまいりましたが、来年 2015 年４月から刊行形態を変更し、季刊として毎年４回発行することになりました。過去においても、月刊から季刊に変更する議案が提出されたことがありましたが、その時は期が熟さないという判断のもと、月刊体制が継続されました。

しかし、厳しい経済環境、変化する社会状況を注視し、その上で本誌をより良い状態で継続させるための道筋をつけるには、季刊誌として再出発することが好ましいという結論に達し、10 月 27 日に開催された臨時総会において、『音楽の世界』の季刊化が正式決定いたしました。前述したように季刊化の実施は来年４月からとなりますが、来年の１月号～３月号は月刊として発行します。従って来年の発行は月刊３回、季刊３回の計６回となり、2016 年から年４回の発行で固定されます。

季刊に変更後の発行月は、冬号（１月）、春号（４月）、夏号（７月）、秋号（10 月）となります。刊行体制の変更前後は、体制移行のための事務処理など難しい問題もありますが、可能な限り読者の皆様にご迷惑をかけず、スムーズに移行出来るようつとめますので、ご理解とご協力のほどお願い致します。

なお、季刊となり、経済的、時間的に出来たゆとりを、本誌の誌面の向上につぎ込み、より魅力的な雑誌とするよう努力する所存ですので、引き続いてご愛読下さるようお願い申し上げます。そしてこの機会にさらなる読者拡大を目指すつもりですので、ご協力いただければ幸いに存じます。なお季刊後の価格は１部 800 円を予定しておりますが、この件につきましては、来月号で出版部よりお知らせします。

日本音楽舞踊会議季刊誌『音楽の世界』編集長　中島 洋一

新年会のご案内

今年も、恒例になりました１月７日の新年会をご案内する季節となりました。

創立５２年目の今年は「邦楽部会」も発足し、１１回の演奏会、月刊「音楽の世界」、会報「エコー」の発行と、各分野が例年にもまして活発な活動を続けて来ることが出来ました。

来年 2015 年には例年の演奏会に加えて、会場の改修で遅れておりました、各部会合同公演「日本音楽舞踊会議 CMDJ 50 周年記念演奏会」を 6 月 14 日(日) に東京文化会館小ホールで開催します。

また、月刊「音楽の世界」は、発行回数を減らし、季刊「音楽の世界」となりますが、内容体裁共に充実させた雑誌で有り続けようと編集部も張り切っております。

2015 年 1 月 7 日の新年会は、気分も新たに 2 年前に竣工したばかりの「新宿イーストサイドスクエア」にある中華「祥龍房」新宿イーストサイドスクエア店で行います。

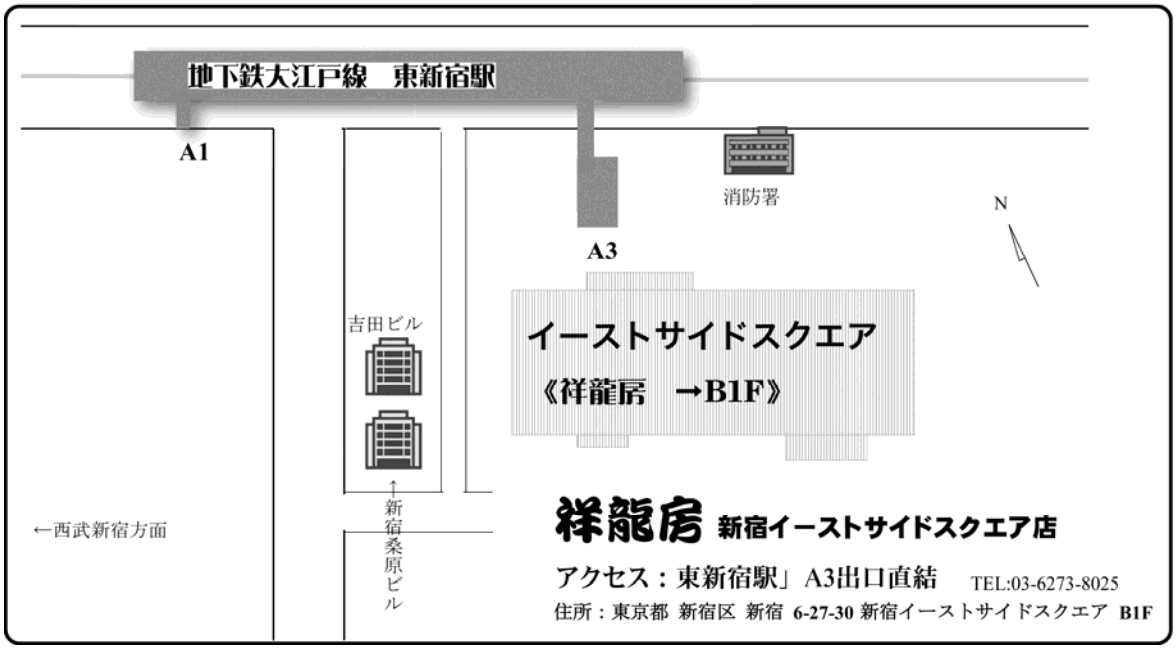
会員の方々はもとより「音楽の世界」読者の方々やご家族もお誘い合わせの上、いつもの、打ち解けたおしゃべりと美味しいお料理を楽しみましょう。

日本音楽舞踊会議　　理事長　北川曉子

記

日本音楽舞踊会議　2015 年 新年会

【日時】2015 年 1 月 7 日（水）18:00～20:00
【会場】中華「**祥龍房**」新宿イーストサイドスクエア店
【会費】5,000 円
会場住所：東京都新宿区新宿６丁目２７－３０新宿イーストサイドスクエア B1
電話：03-6273-8025
アクセス：副都心線・都営大江戸線「東新宿駅」A3 出口に直結
　丸ノ内線・副都心線・都営地下鉄新宿線「新宿三丁目駅」E1 出口徒歩 6 分
　　（下に掲載した地図を参照）



会と会員の情報

１．ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

2015 年 1 月

7 日(水) 2015 年度第1 回理事会【15:30～17:30　日本音楽舞踊会議事務所】
7 日(水)日本音楽舞踊会議 新年会【会場:祥龍房・イーストサイドスクエア店
大江戸線・副都心線東新宿駅 A3 出口直結 18:00～20:00 会費　5,000 円】
11 日(日) 『音楽の世界』編集会議【会事務所 14:00～】
12 日(月)（橘川琢作曲「TOKYO TO NEW YORK 2015」東京コンサート
橘川琢：秋月譜（Autumn Moonlight）　(World Premier 世界初演)
【16:00 スペース Do (Space Do)　4,000 円】
16 日(金) 声楽部会公演　「2015 年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」
出演：佐藤光政・内田暁子・浦 富美・笠原たか・小室由美子・高橋順子・
中村貴代・渡辺裕子
ピアノ：石橋美知子・亀井奈緒美・島筒英夫・中嶋祐子・服部信子
ヴァイオリン：渡辺せいら
【すみだトリフォニー小ホール 14：30 開演 一般 2500 円】
24 日(土) 滝澤三枝子ピアノ・前田ヒロミツ テノールリサイタル
ラルゴ（ヘンデル）三人のムーア娘（スペイン歌曲・オブラドルス）
さくら幻想曲（平井康三郎）他
【起雲閣・音楽サロン(熱海) 14:30　2,500 円、中学生以下 1,000 円
お問合せ：080-5027-3338（公演事務局）】

2　月

1 日(日) ピアノ部会試演会【戸引会員高円寺スタジオ 10:00～】
4 日(水) 動き 舞踊 所作と音楽 第 3 回公演 【すみだトリフォニー小ホール】
7 日(土) ２ 月度定例理事会　【会事務所 19:00】
8 日(日) 原口摩純 ピティナトークコンサート
ピアノソロ、連弾、ブラームス:ピアノトリオ
【フィリアホール/横浜青葉台 入場無料問合せ申込：ピティナ 03-3944-1583】
11 日(水・祝) 日本音楽舞踊会議 2015 年度（第 53 期）定期総会
【練馬文化センター集会室 13:30～16:30】

3　月

5 日(木) 邦楽部会第 2 回演奏会【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定
7 日(土) ３月度定例理事会　【会事務所 19:00】
8 日(日) 原口摩純ソロリサイタル　ヤマハ銀座サロンコンサート
【お問合せ＆お申込み：ヤマハ銀座店 03-3572-3132】
10 日(火) 深沢亮子　朝日カルチャーセンター　共演：水野由紀 Vn.　曲目未定
【新宿住友ビル７F　13 時～　問合せ　朝日カルチャーセンター】
16 日(月) 第６回フランス歌曲研究コンサート　18:30～中目黒ＧＴプラザホール

4　月

7日(火) **４月度定例理事会【会事務所 19:00】**

10日(金) **フレッシュコンサート 2015 【すみだトリフォニー小ホール詳細未定】**

11日(土) 深沢亮子　シューベルト･ソサエティー　20周年記念コンサート
【 紀尾井ホール　時間･曲目未定　問合せ：03-5805-6303（F.SS）】

5　月

7日(木) **５月度定例理事会　【会事務所 19:00】**

14日(木) **作曲部会公演【すみだトリフォニー小ホール 詳細企画中】**

16日(土) 深沢亮子コンサート　演奏とお話（曲目未定）
【14：30開演　お問合せ　東金文化会館小ホール 0475-55-6211】

29日(金)深沢亮子ピアノリサイタル　モーツァルトとシューベルトの夕べ
【19：00　浜離宮朝日ホール　問合せ：新演奏家協会　03-3561-5012】

6　月

8日(月) **６月度定例理事会　【会事務所 19:00】**

14日(日) **日本音楽舞踊会議 CMDJ　創立 50 周年記念演奏会**
【東京文化会館小ホール　詳細企画進行中】

7　月

3日(金) **声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」**
【すみだトリフォニー小ホール午後公演(詳細未定)】

7日(火) **７月度定例理事会　【会事務所 19:00】**

9　月

29日(火) **CMDJ2015 年　オペラコンサート**
【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

10　月

12日(月・祝)**様々な音の風景ＸⅡ（２０世紀以降の音楽とその潮流）**
【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

会員スケジュールの表示（凡例）について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催（含む、各部会主催）公演予定です。
明朝体文字は会員から寄せられた情報、および、会関係者が企画、参加して居る事業の情報です。
明朝体太文字は運営に関わる会議等の予定です。
明朝体文字の「会員から寄せられた情報」等は原文に従いますが、内容順を変更する場合があります。

正会員・準会員・賛助会員の皆様へ

○上記スケジュールに記載の本会主催事業には、会員・準会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料または会員割引料金でご入場頂けます。
○会員の皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。
○お知らせの際は、①○月○日（曜日）□会員名　□催し物(出版物等)名□メインプログラム一曲名、もしくは公演・講演の内容を一つ　□【開催場所】、開演時間、入場券価格、等の順番でお書きください。

編集後記

あけましておめでとうございます。めまぐるしく忙しい師走の時期を乗り越え、ようやくおちつかれたことと思います。先月からお知らせしているように、『音楽の世界』は本年の４月から季刊に移行します。しかし、発行回数が少なくなった分、良い記事を集め、内容を充実させなくてはならないと心しております。新年号の特集、新春座談会においては、様々な世代の会員が熱の籠もった意見を闘わせておりましたが、私は司会をしていて、この会のパワーは健在だなと頼もしく感じました。

17 日の新年会には多くの方々のご来場をお待ちしております。新年会が終わると 16 日には声楽部会公演「2015 年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」が開催され、本会のコンサートがスタートします。本年が実りある年であることを、みなさまとともに願いたいと思います。

（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
	㈱ジュンク堂書店　東京外商部	03-6457-7049
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	㈱東海図書館サービス	052-501-0263
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
	㈱ジュンク堂書店　外商本部　大阪支社	06-4693-8210
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長 ： 橘川 琢　高橋 通　湯浅玲子
編集部員：新井知子　浦 富美　栗栖麻衣子　小西徹郎　高島和義　高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦

音楽の世界１月号(通巻 565 号)
2015 年 1 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 462 円)
発行人：芙二　三枝子
編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場 4－1－6　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496
HP：http:// cmdj1962.com/　　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp
http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　（アーカイブ）
A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471
購読料　年間：5000 円　（6 ヶ月：2500 円）　振替 00110－4－65140（日本音楽舞踊会議）
＊日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております
＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします